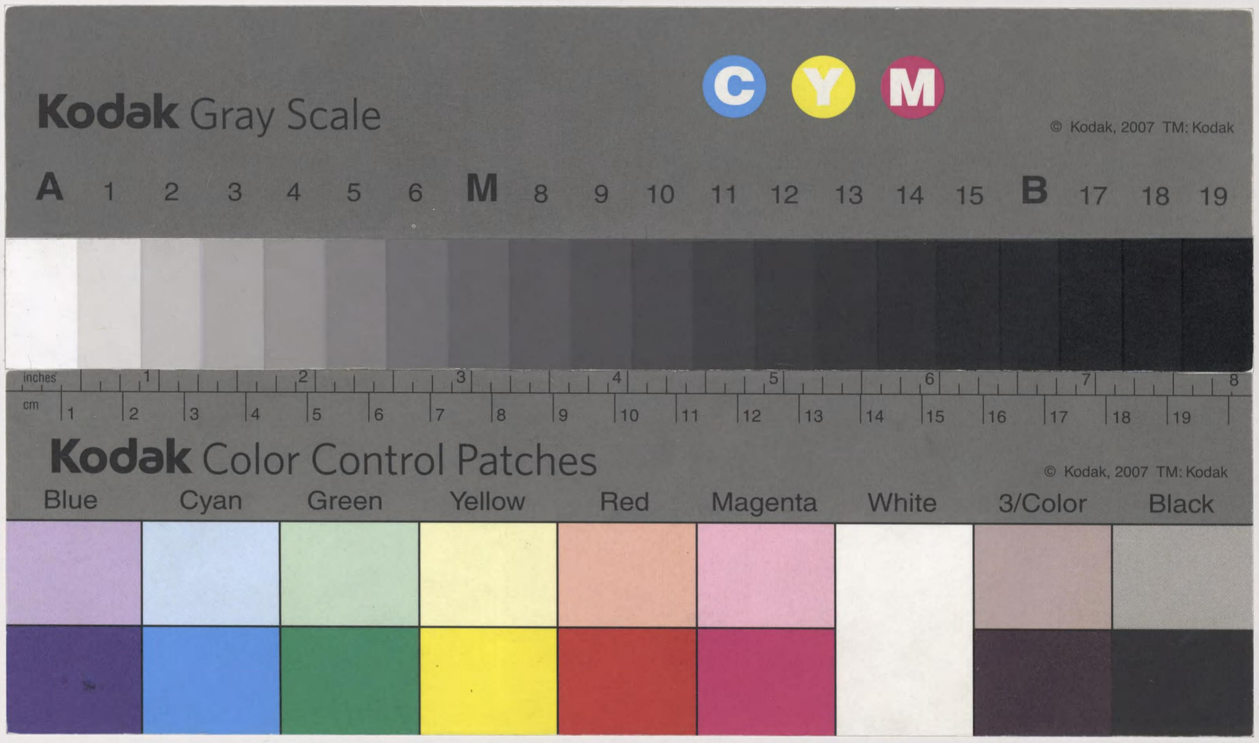
日本名筆全集

續書狀集



237
379

237-379
1200800064289

260

日本名筆全集 續書狀集

237
379

日本名筆全集

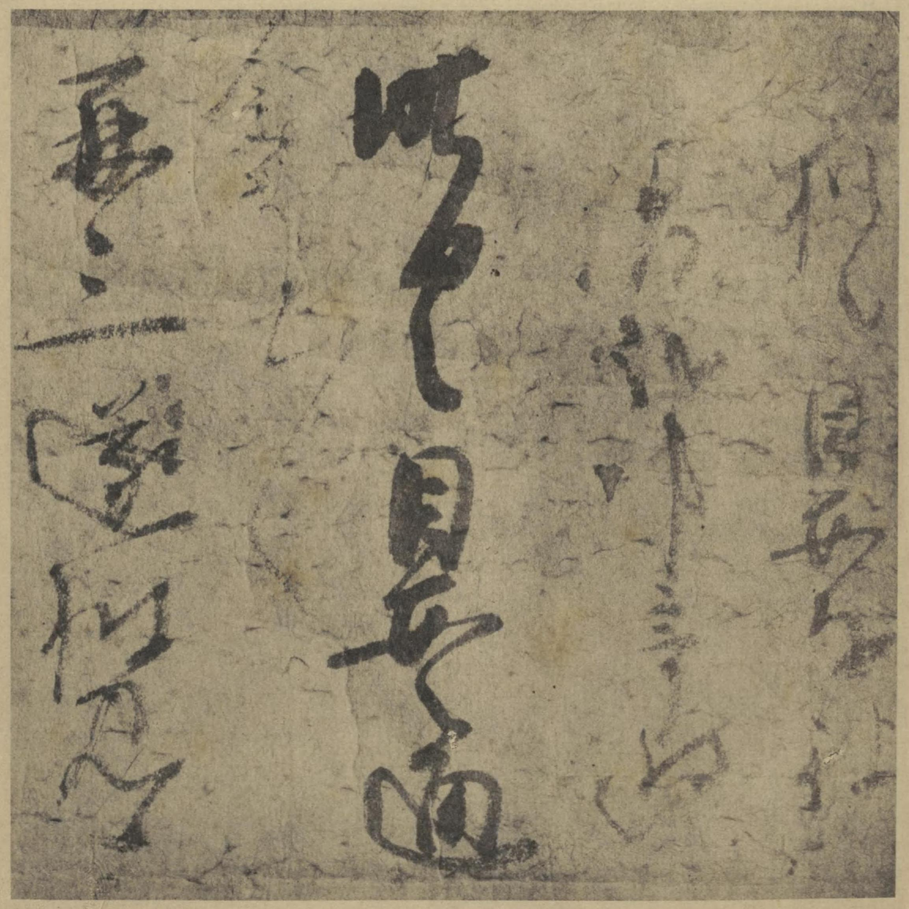
續書狀集

岩橋小彌太

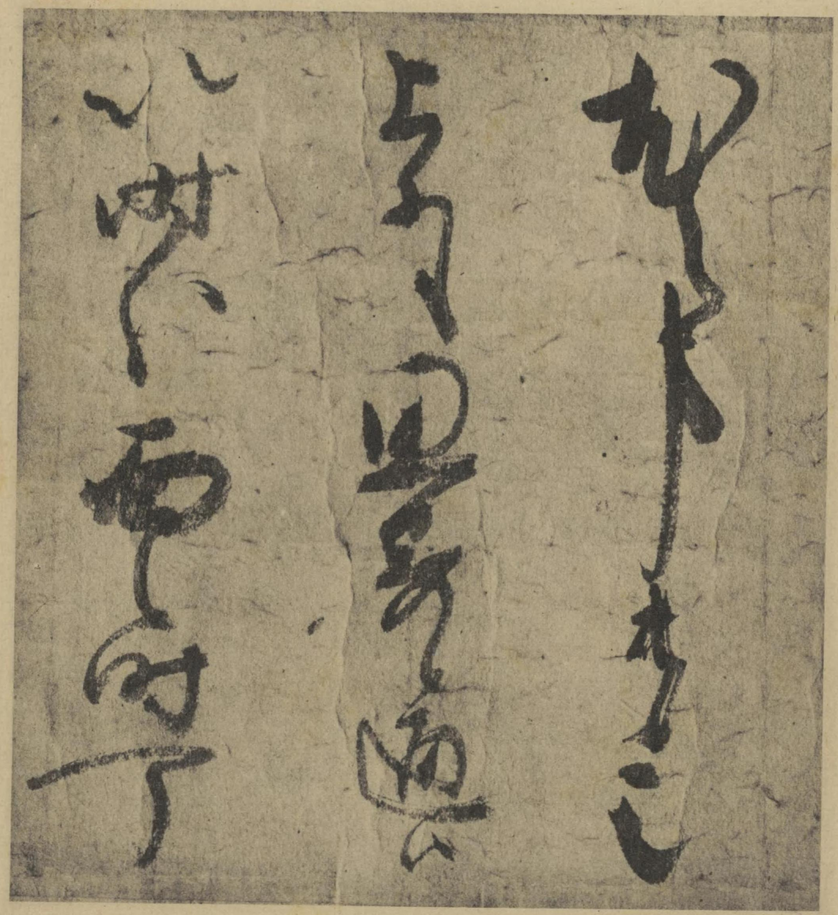
續書狀集 目次

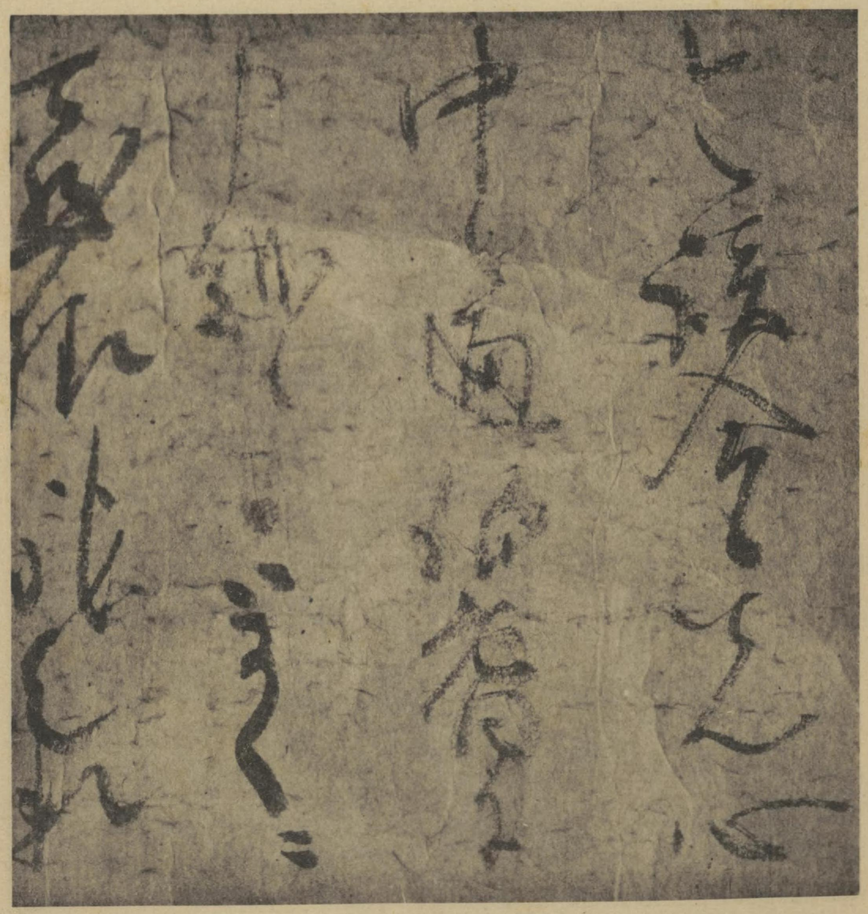
一 近衞信尹書狀 史料編纂所々藏……（コロタイプ）一……（解說）一
二 近衞信尋書狀 所藏者不知（史料編纂所々藏寫眞に據る）……六……二
三 瀧本坊昭乘書狀 本間莊太郎氏所藏……八……二
四 本阿彌光悅書狀 東京帝室博物館所藏……一一……四
五 澤庵宗彭書狀 保阪潤治氏所藏……一八……五
六 石川丈山書狀 史料編纂所々藏……二二……五
七 新井白石書狀 龍肅氏所藏……三〇……七
八 荻生徂徠書狀 辻善之助氏所藏……三六……八
九 細井廣澤書狀 所藏者不知（史料編纂所々藏寫眞に據る）……四〇……八
一〇 中井竹山書狀 編者所藏……四三……九
一一 荷田春滿書狀 佐佐木信綱氏所藏……四五……九
一二 賀茂眞淵書狀 佐佐木信綱氏所藏……四七……一〇
一三 本居宣長書狀 猪熊信男氏所藏……五二……一一
一四 加藤千蔭書狀 大島雅太郎氏所藏……五八……一三

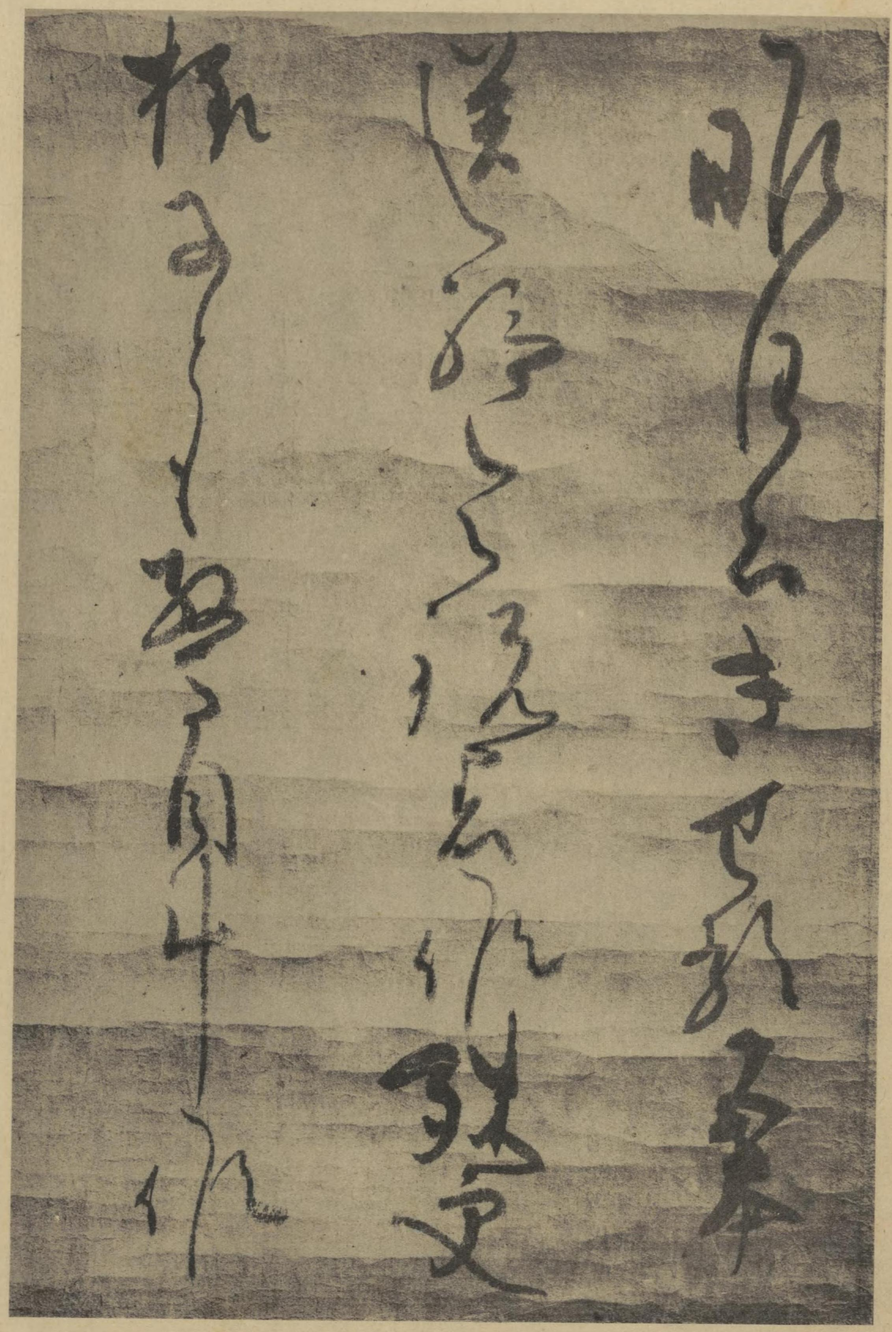
目次 終

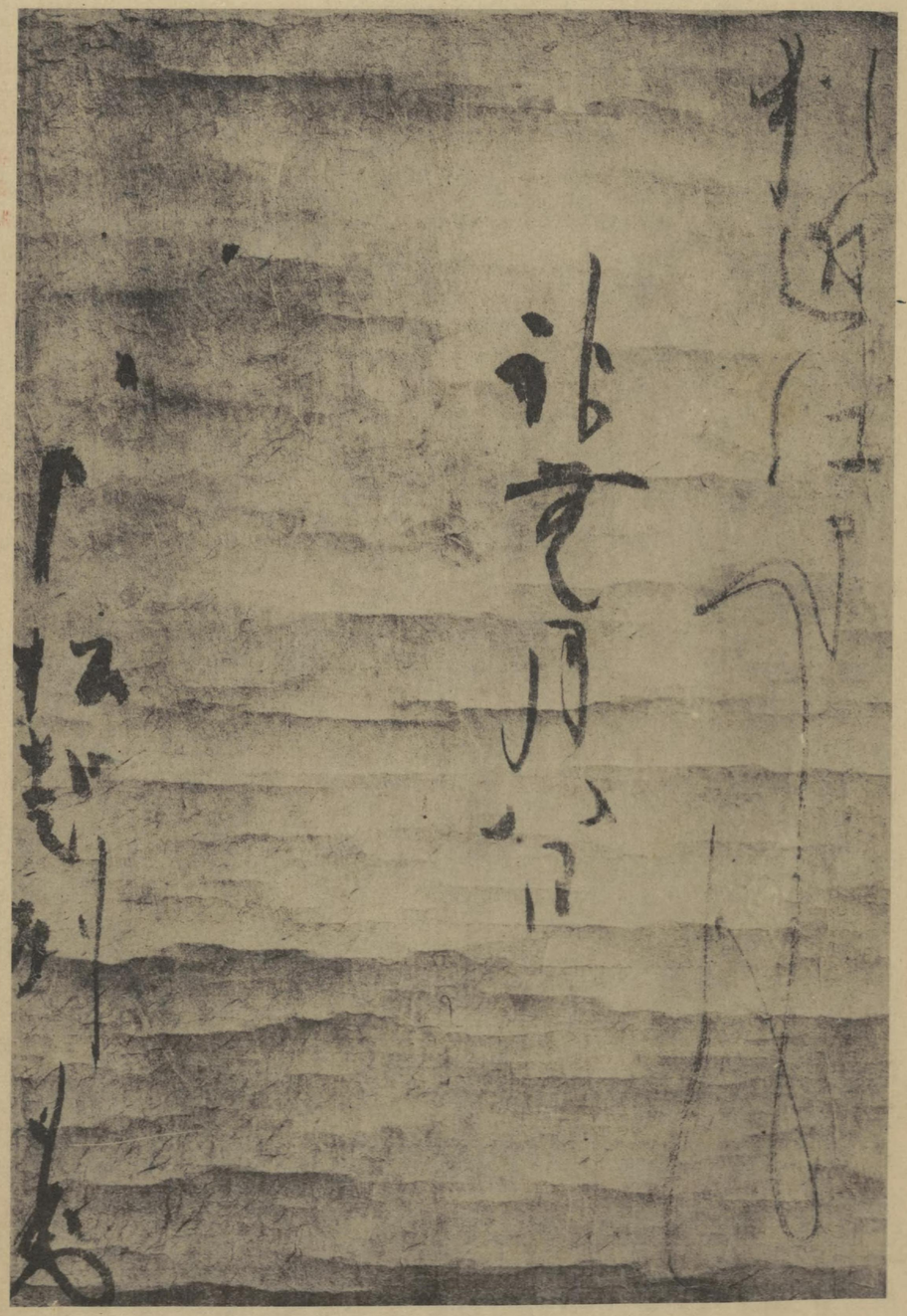


一 近衞信尹書狀

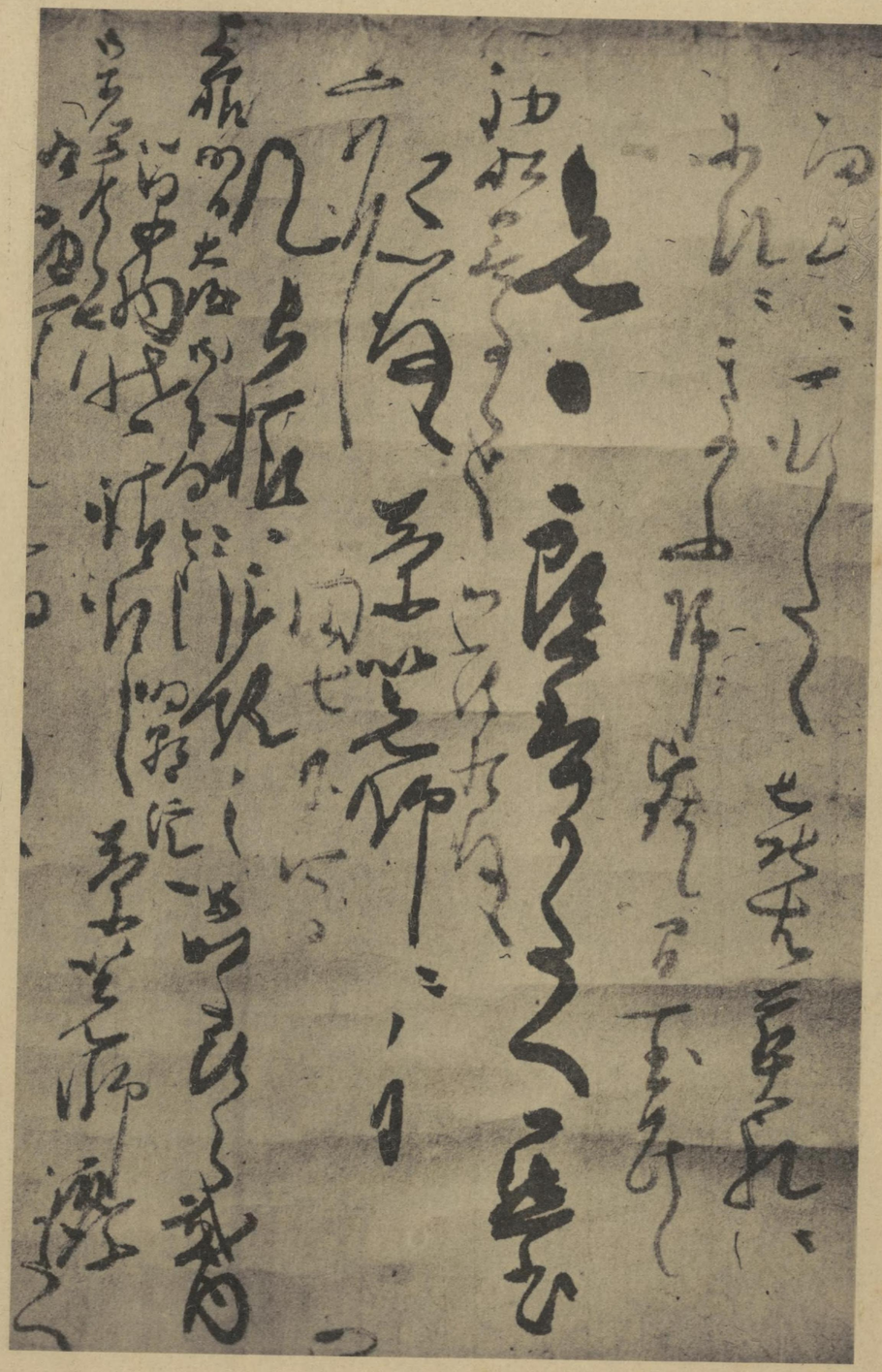


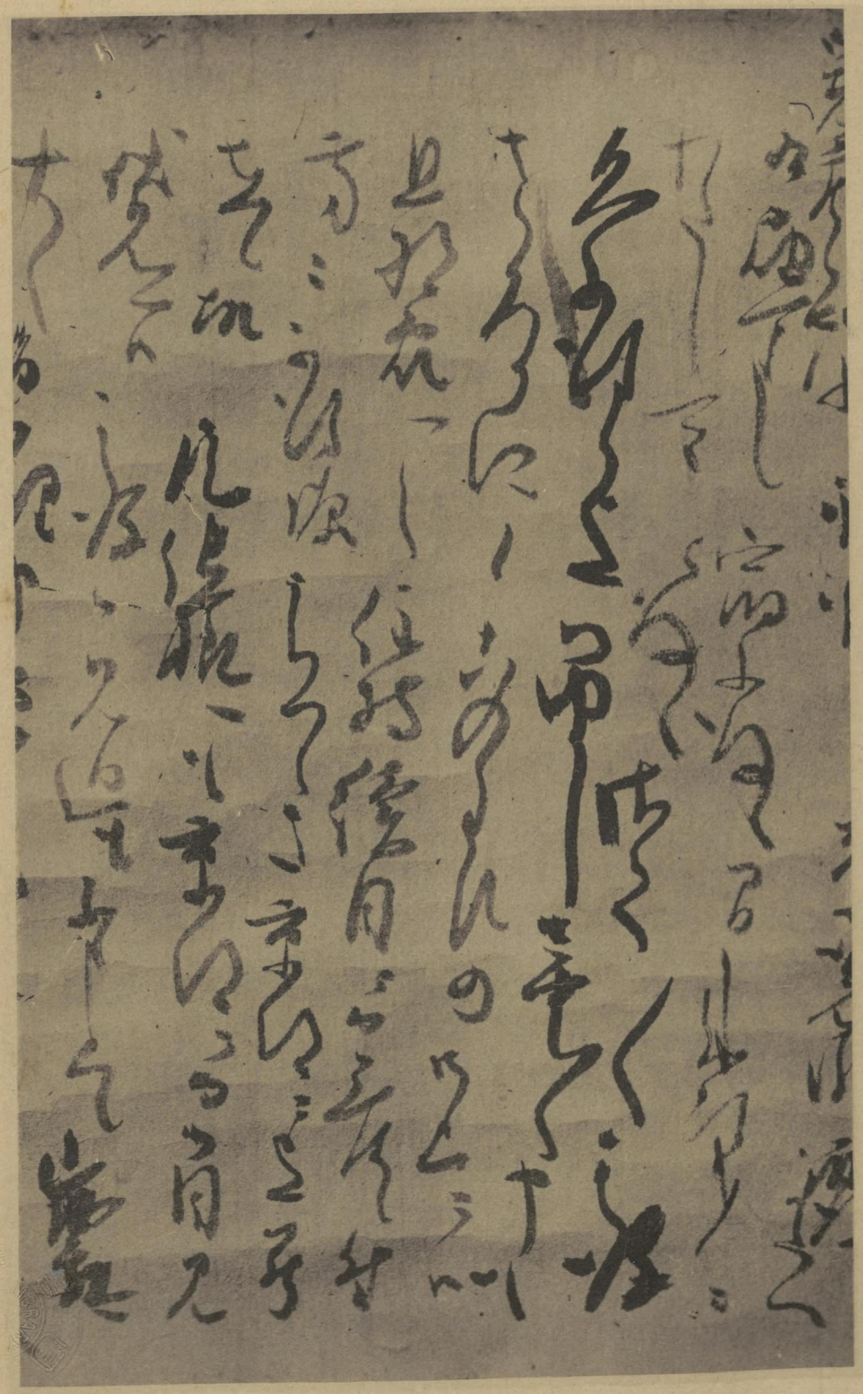


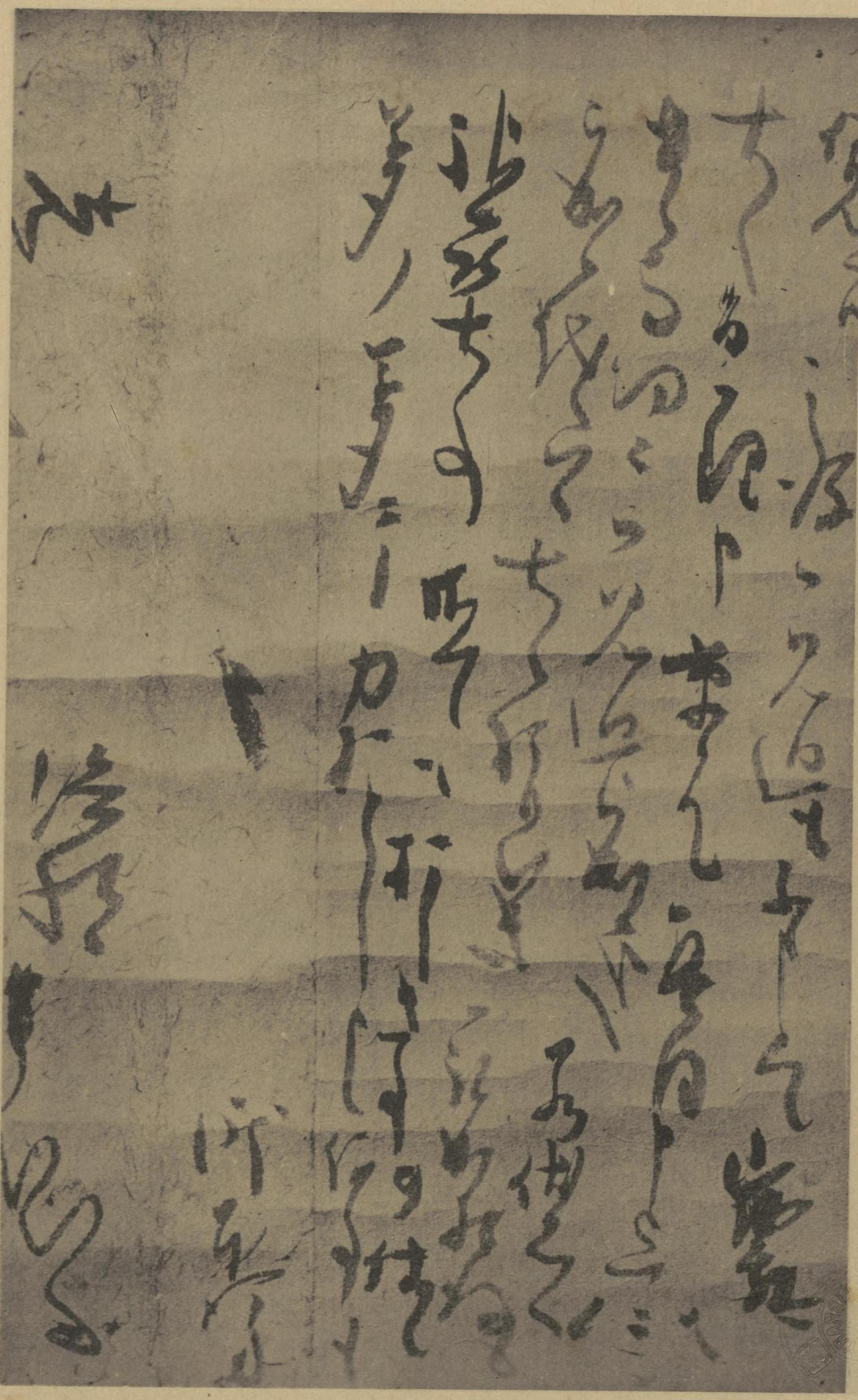




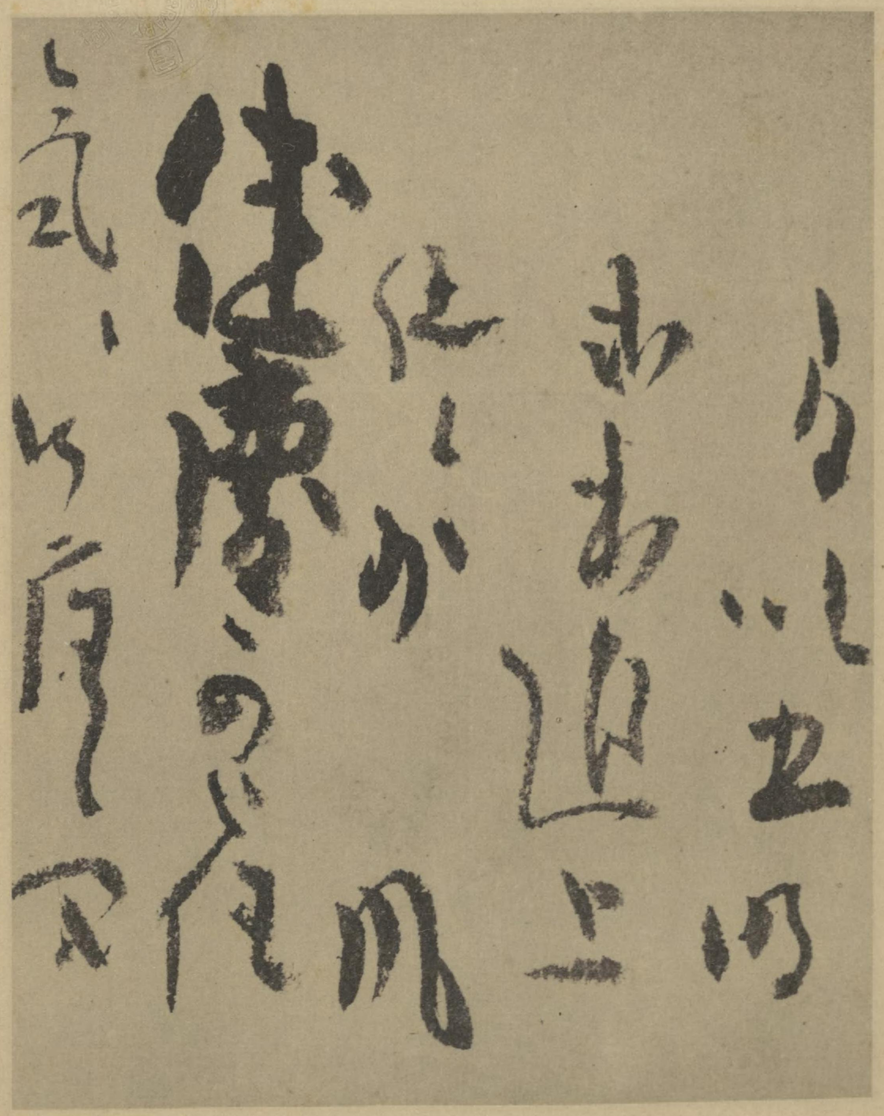
三　瀧本坊昭乗書狀

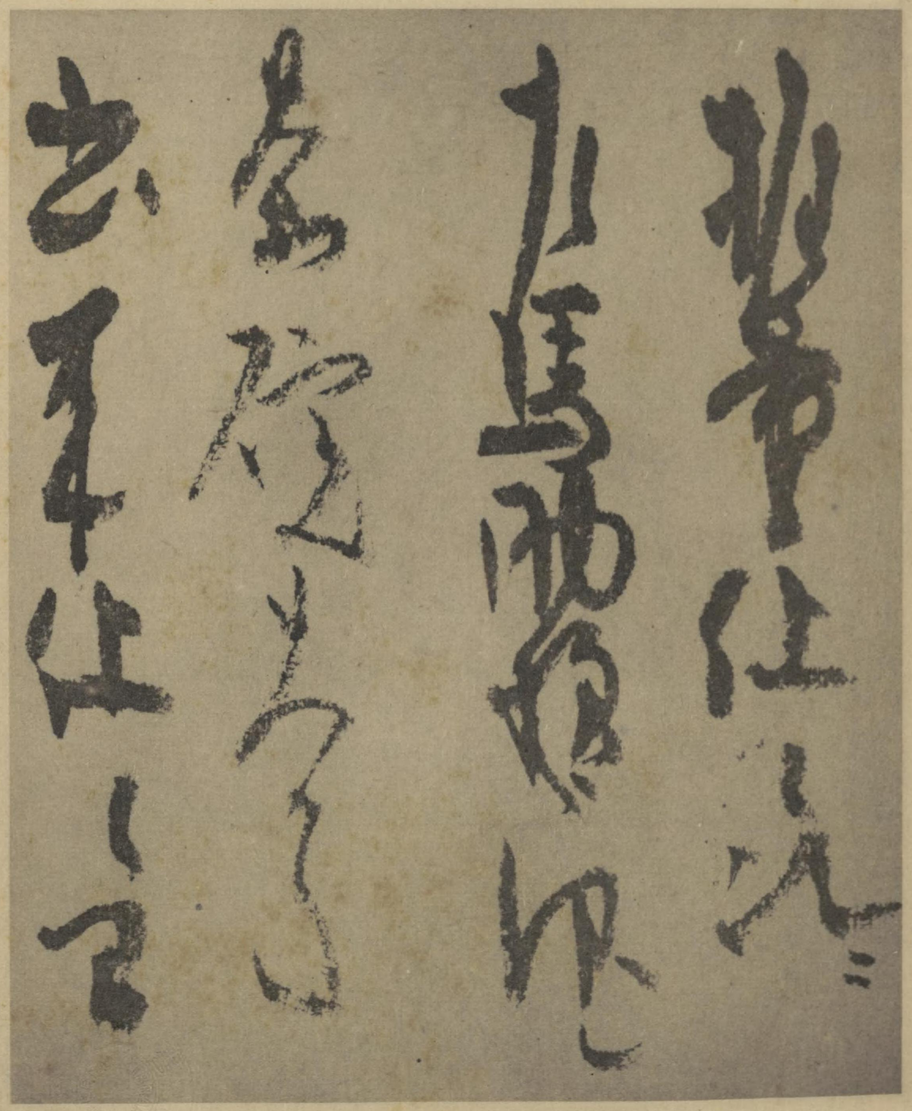


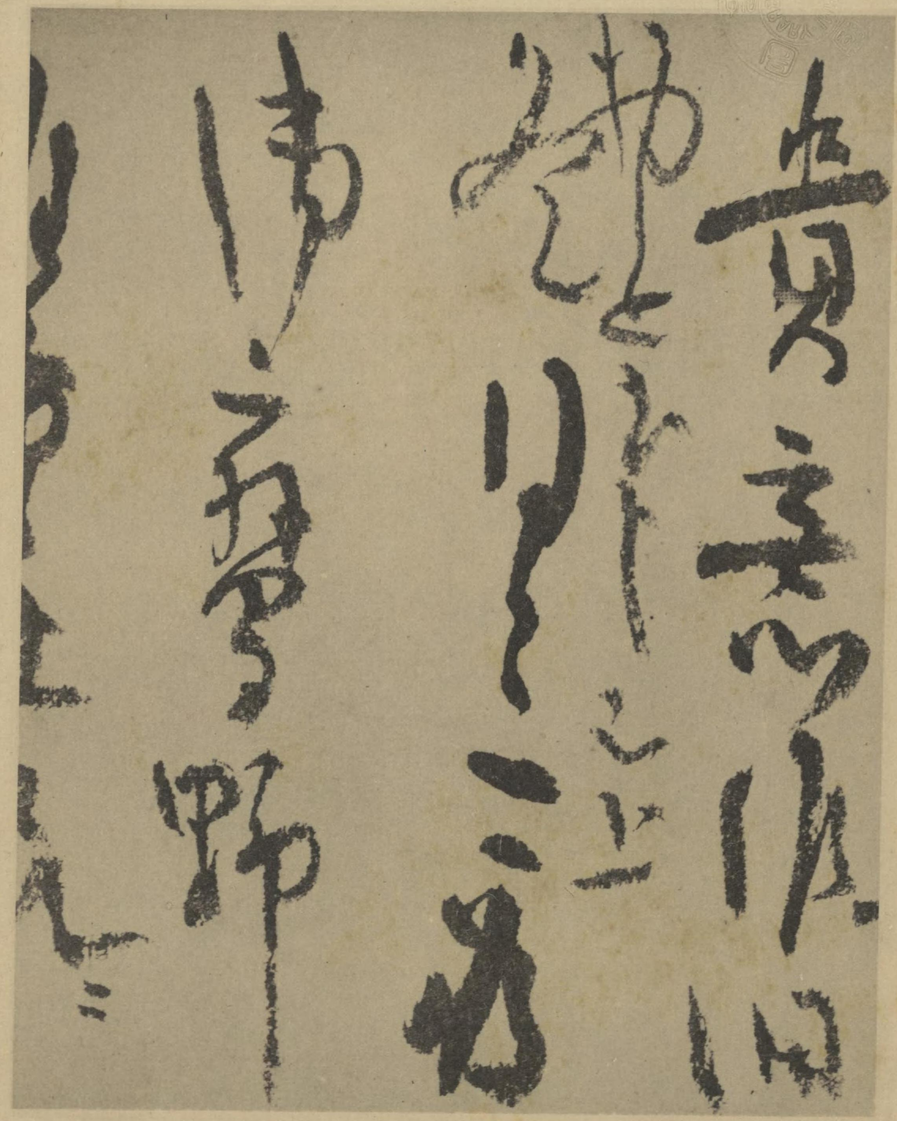


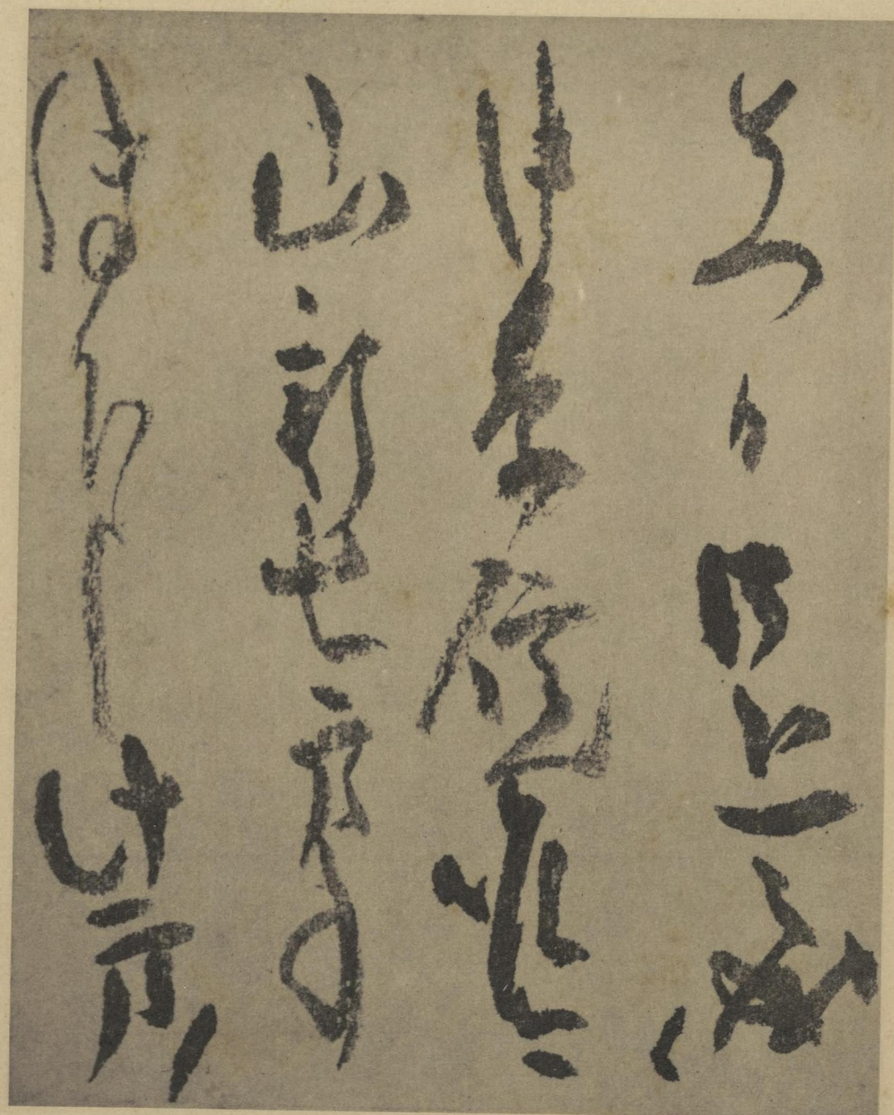


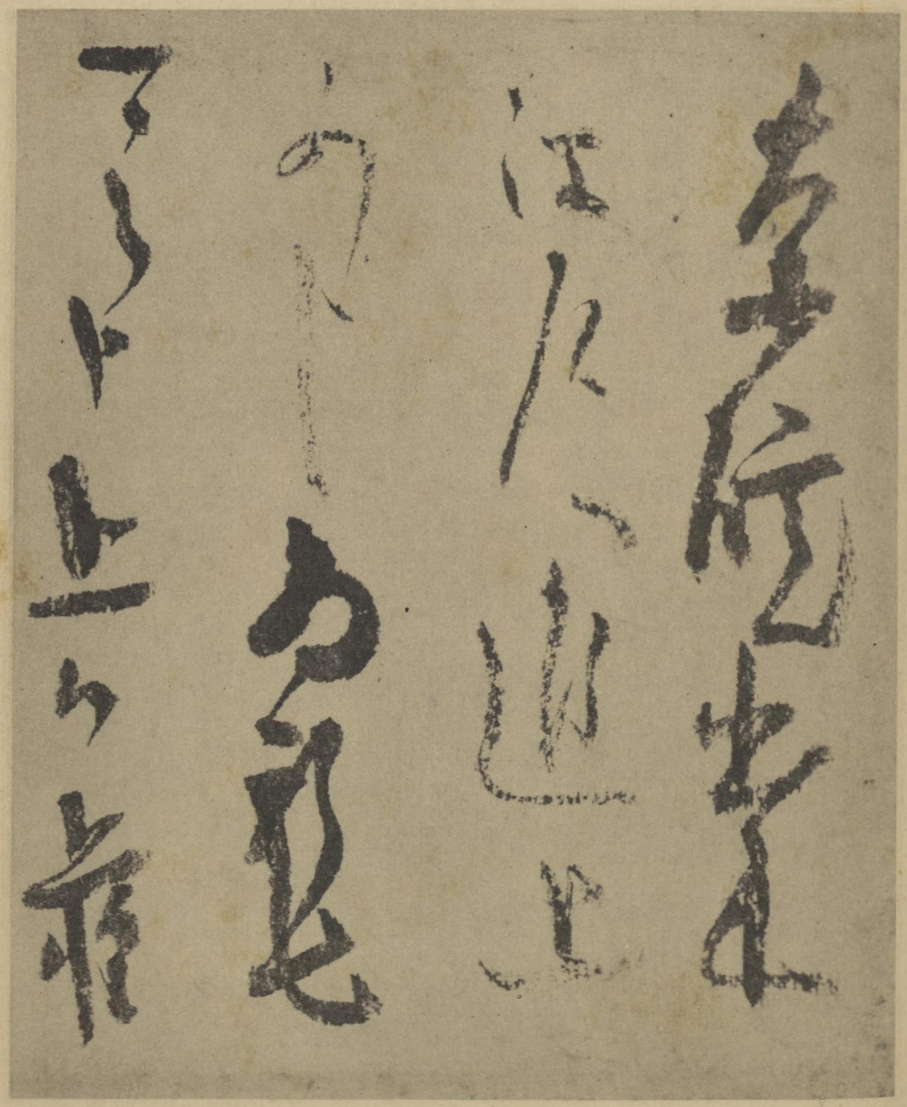
四　本阿彌光悦書狀

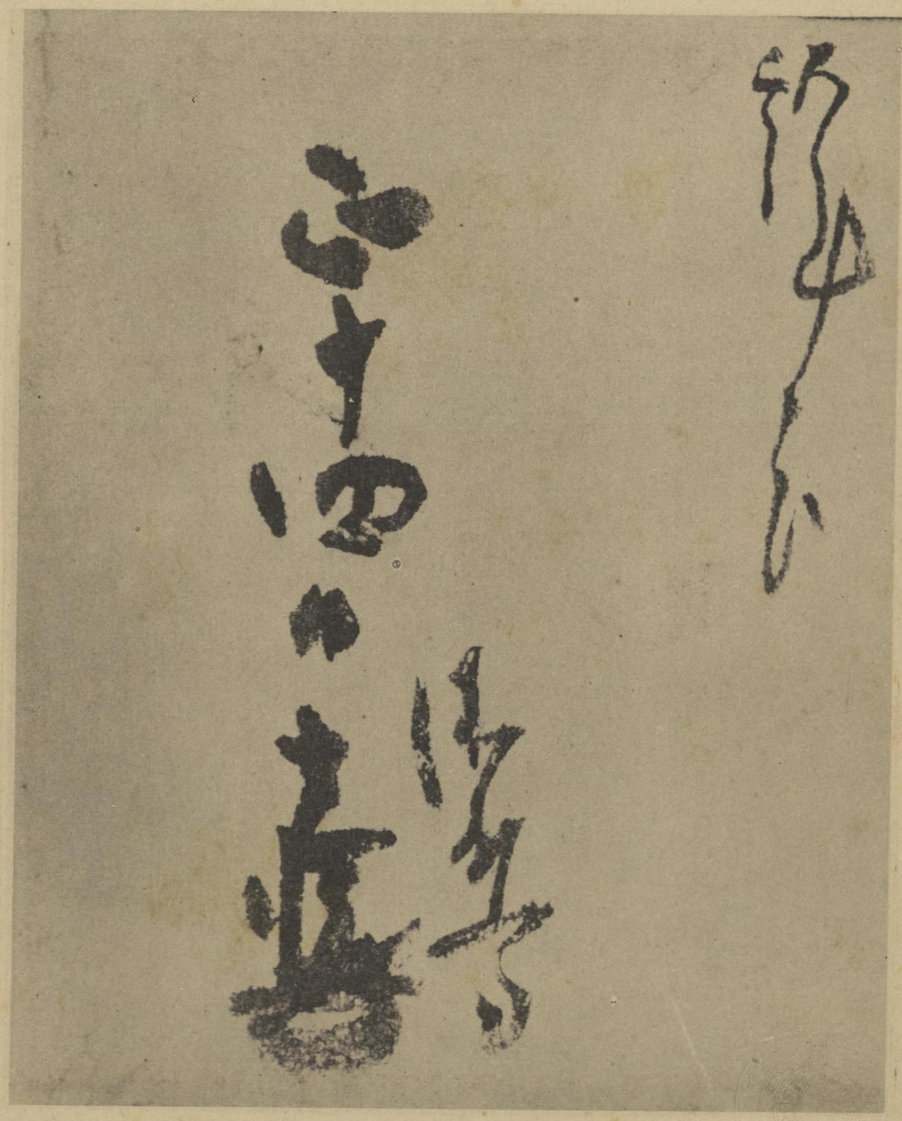


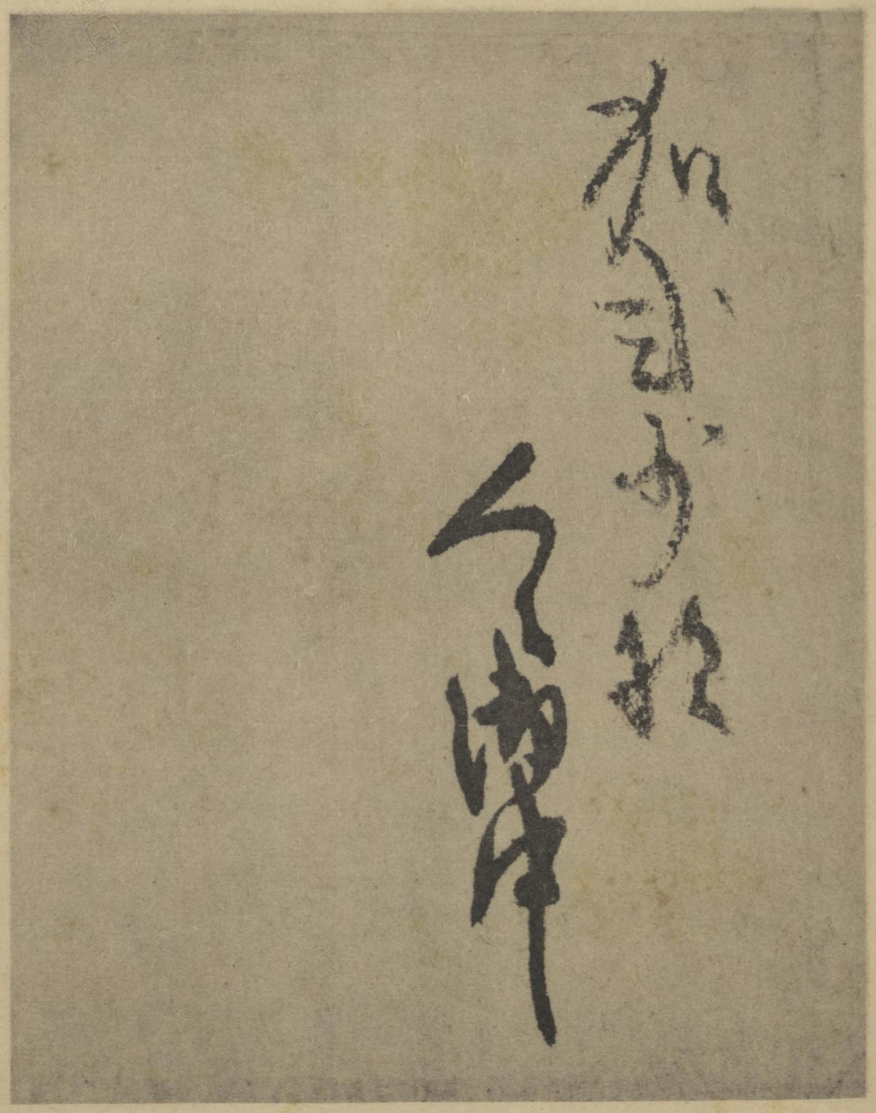


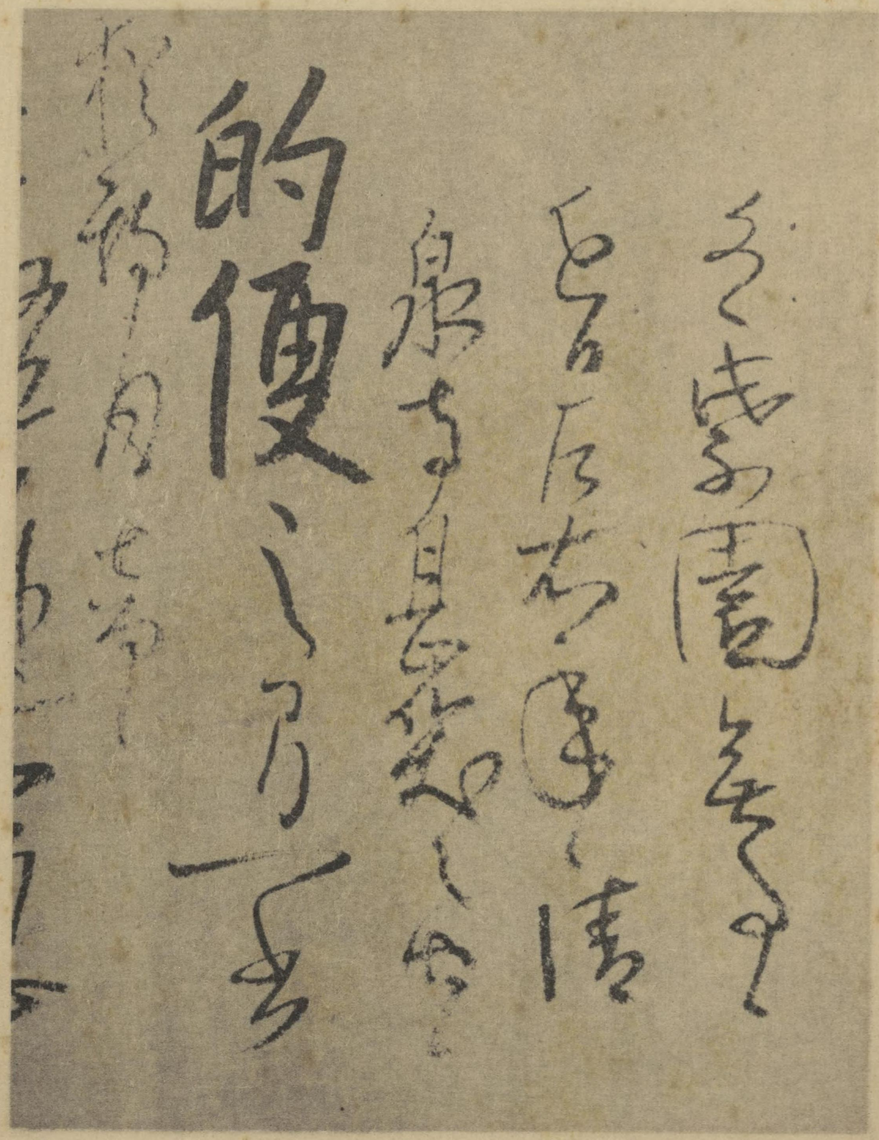


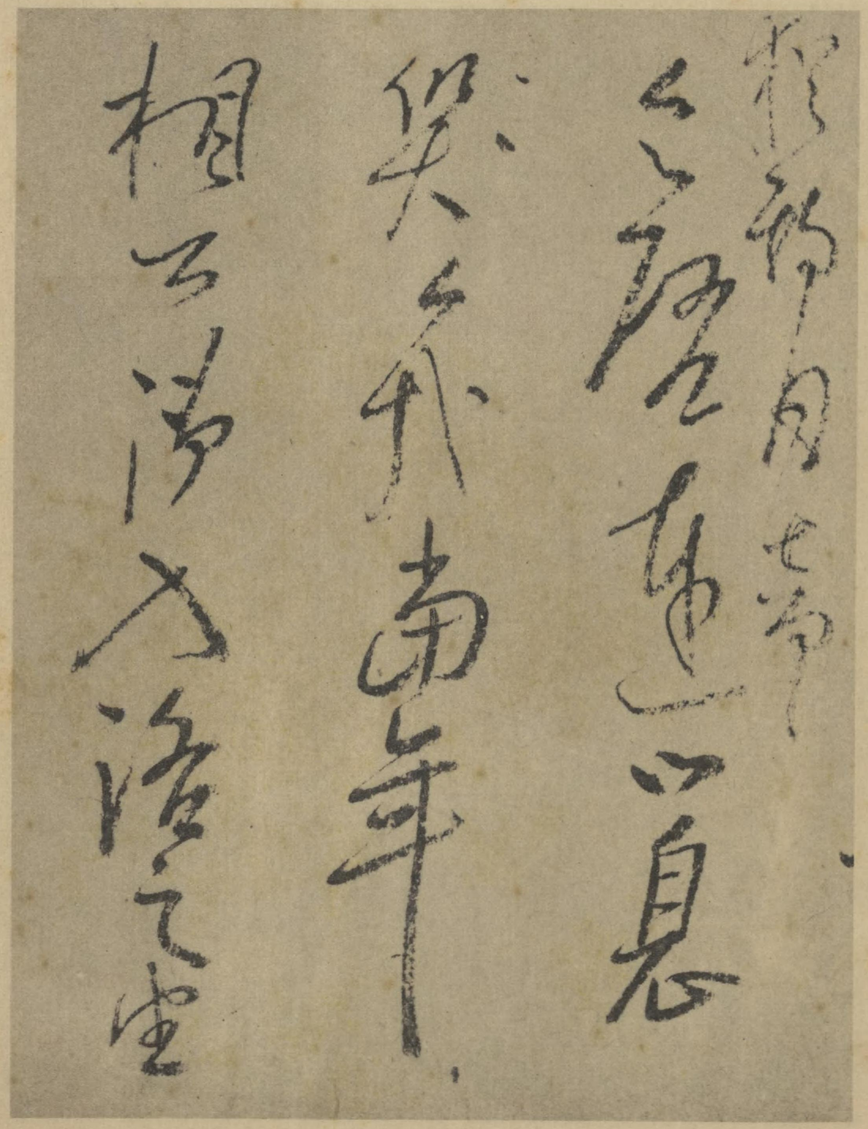


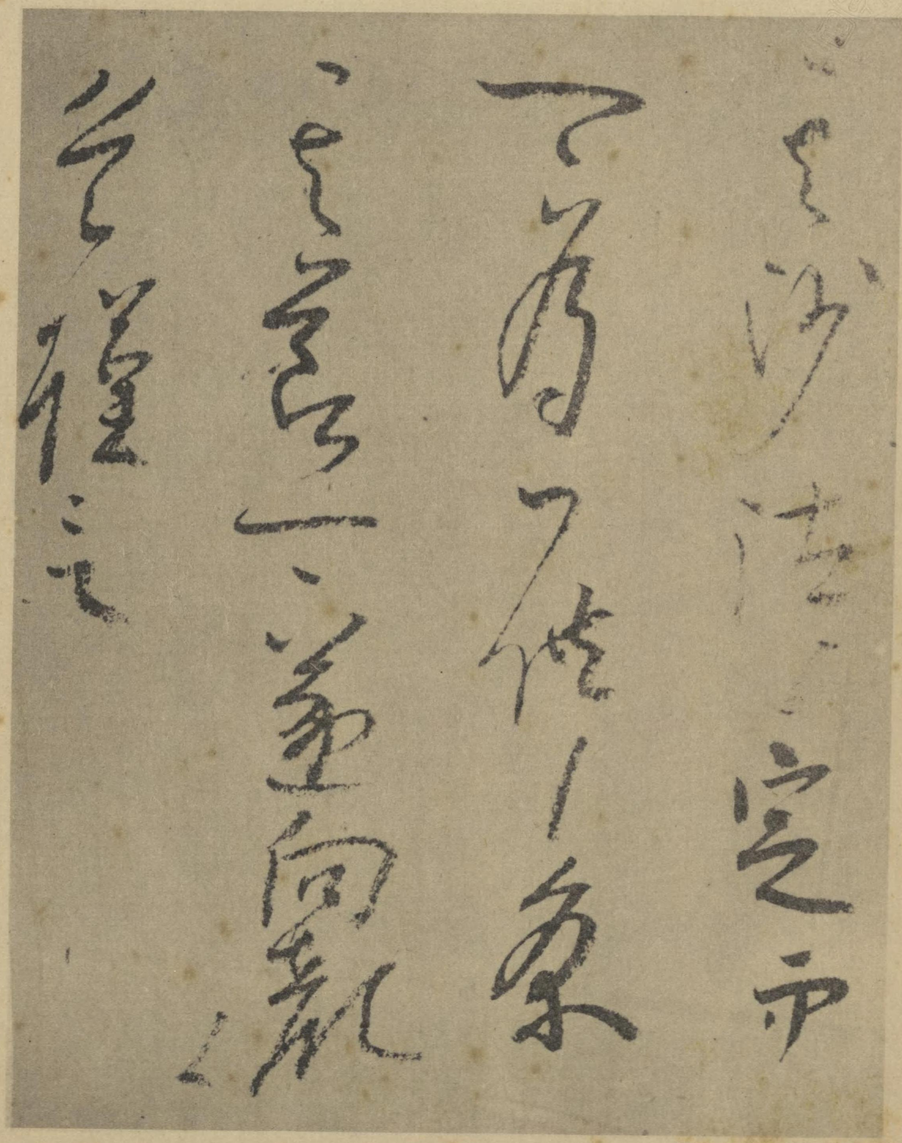


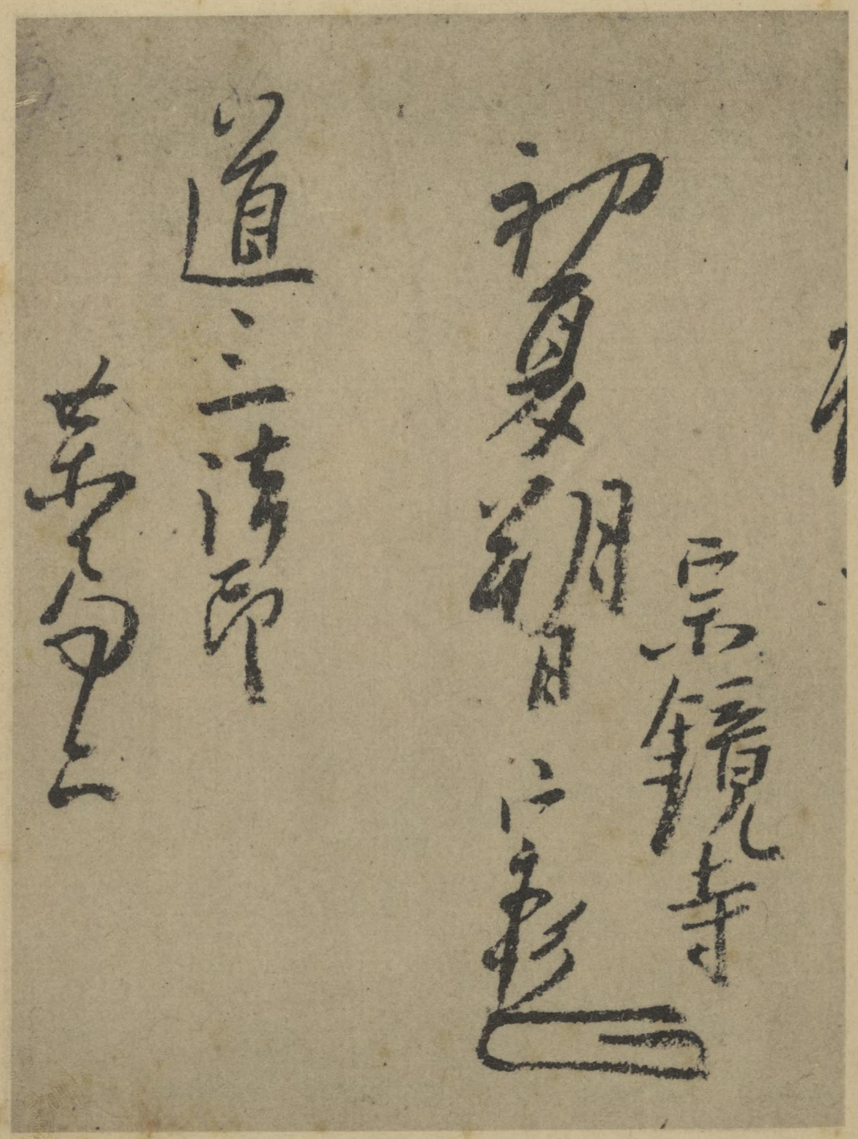


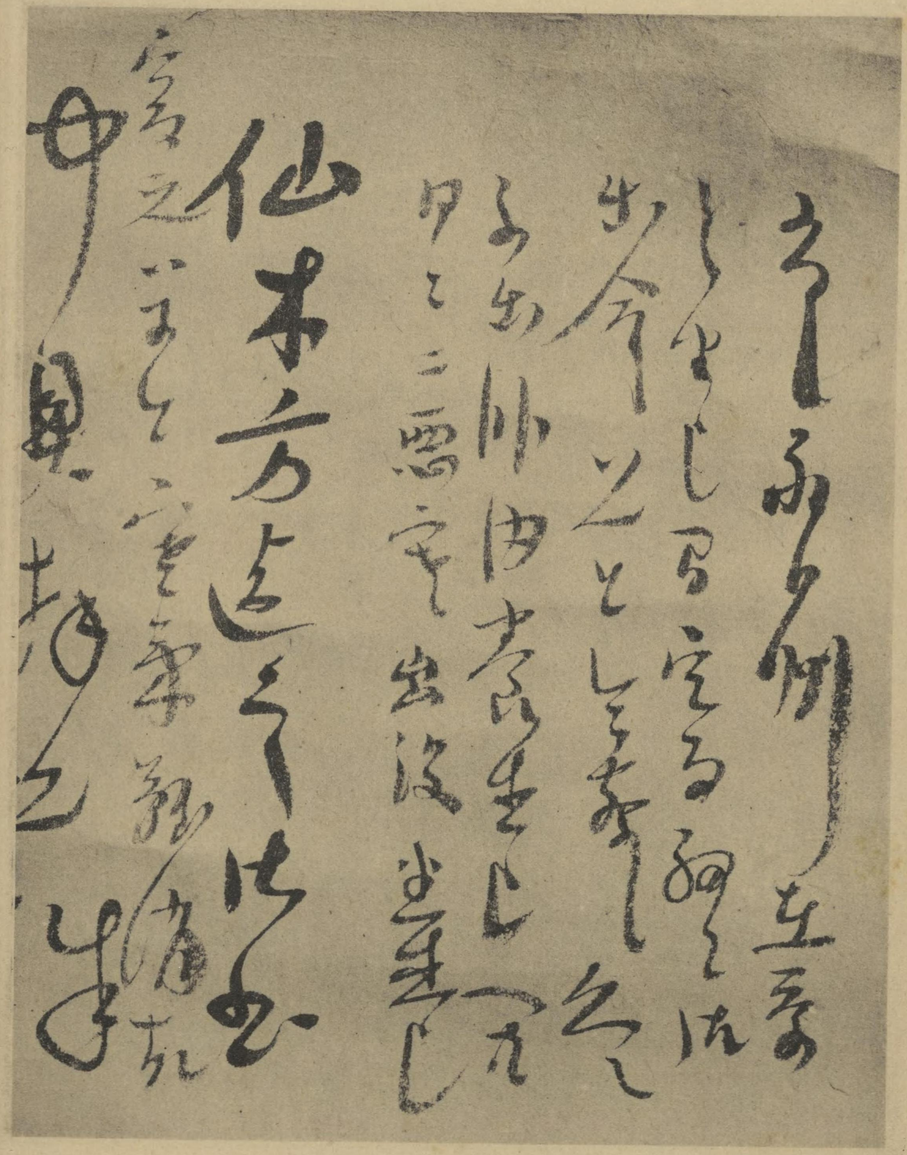


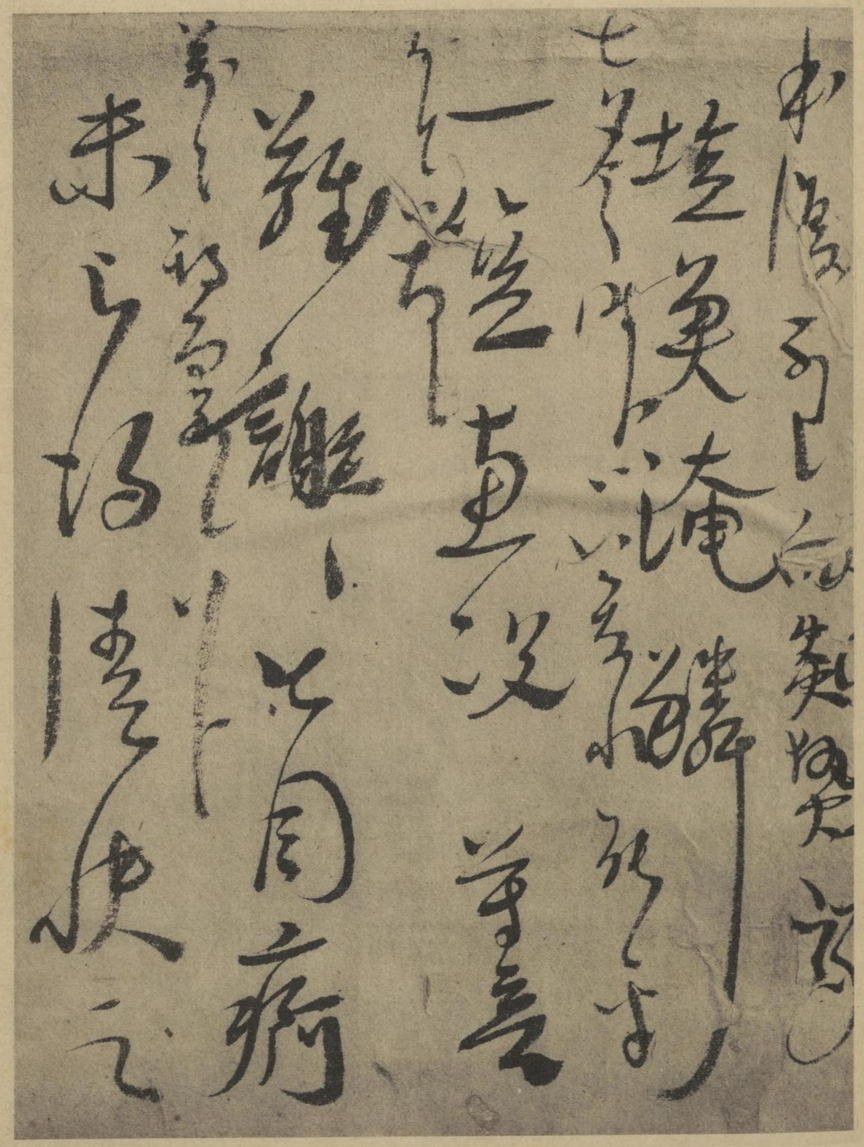


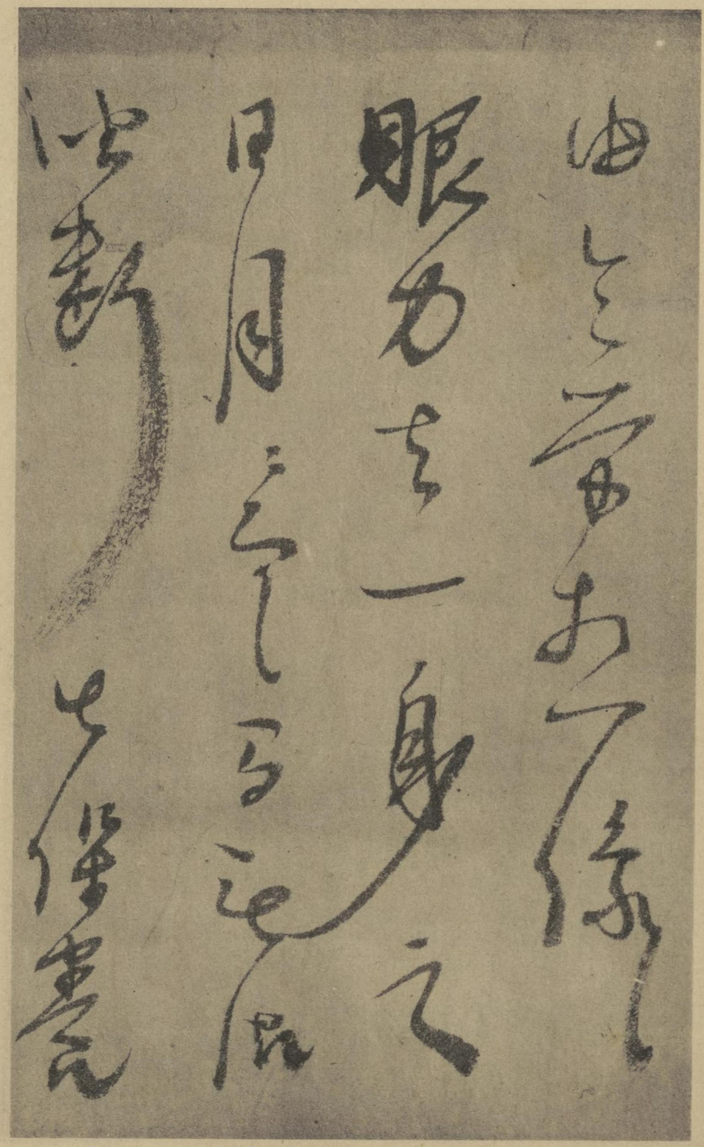


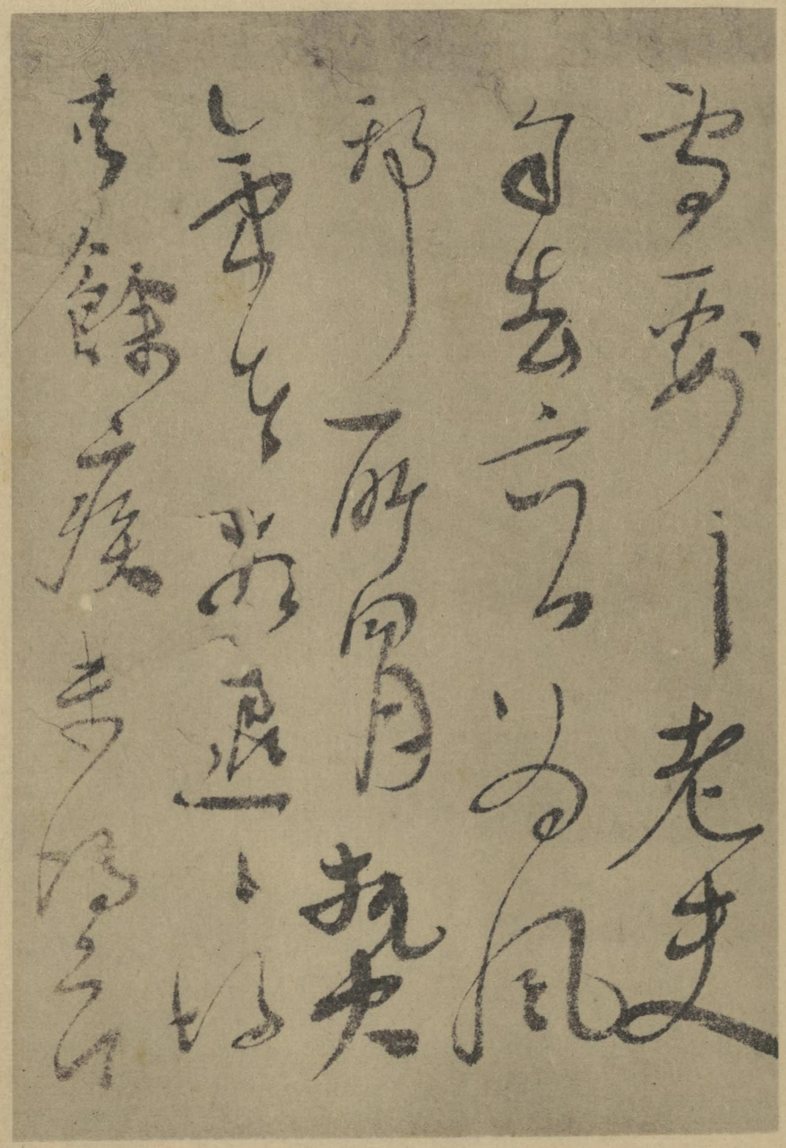


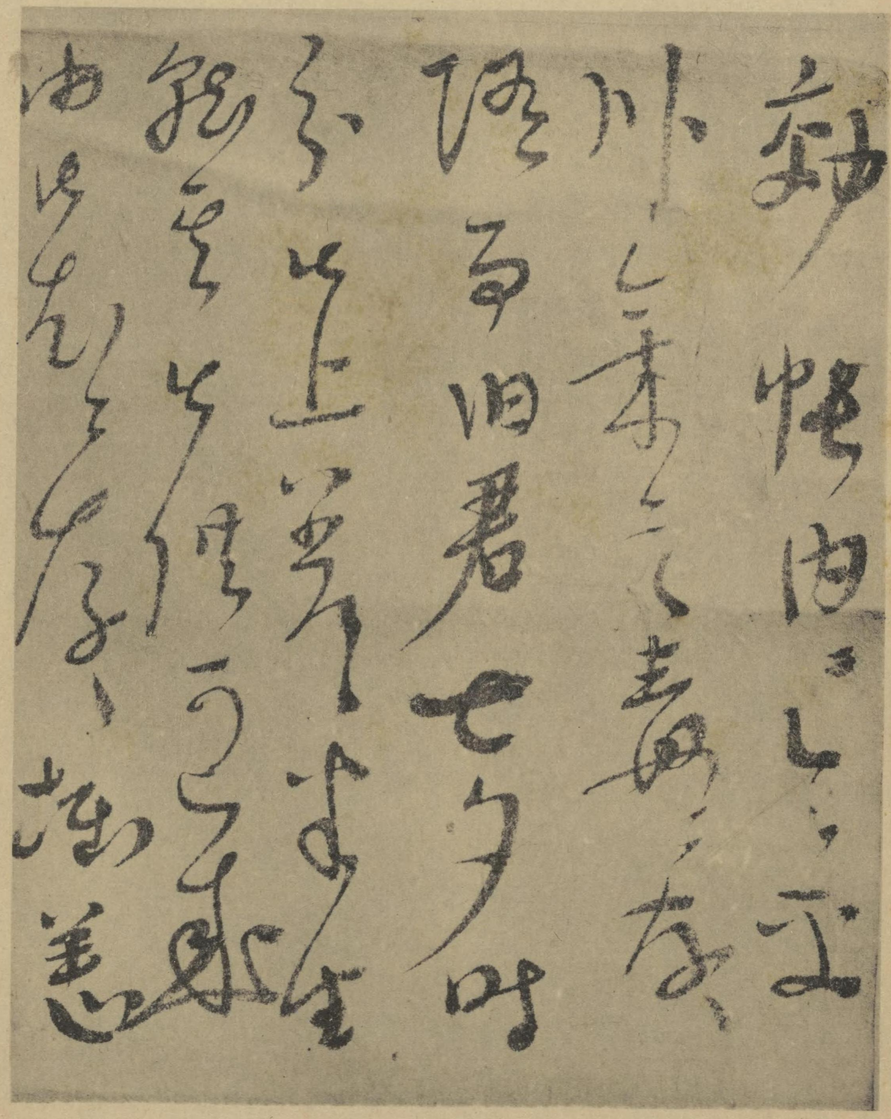

宗鏡寺

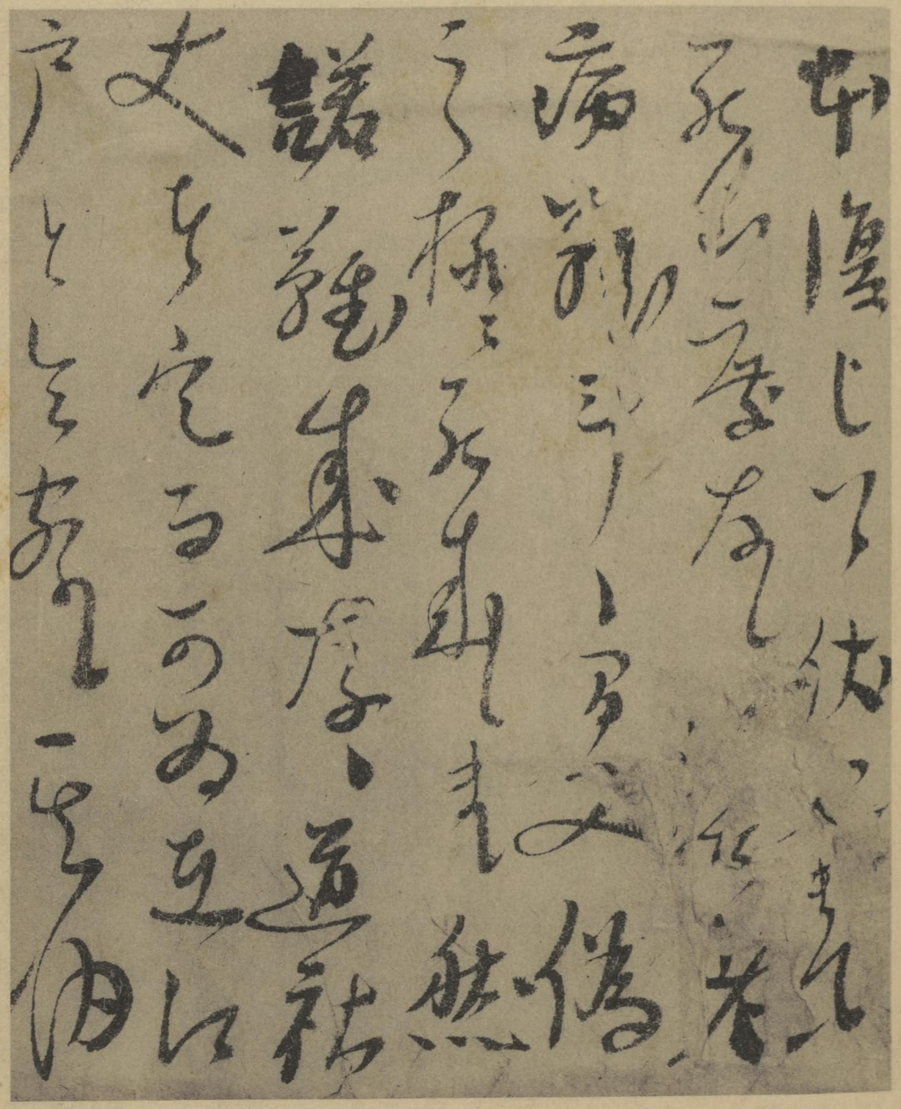


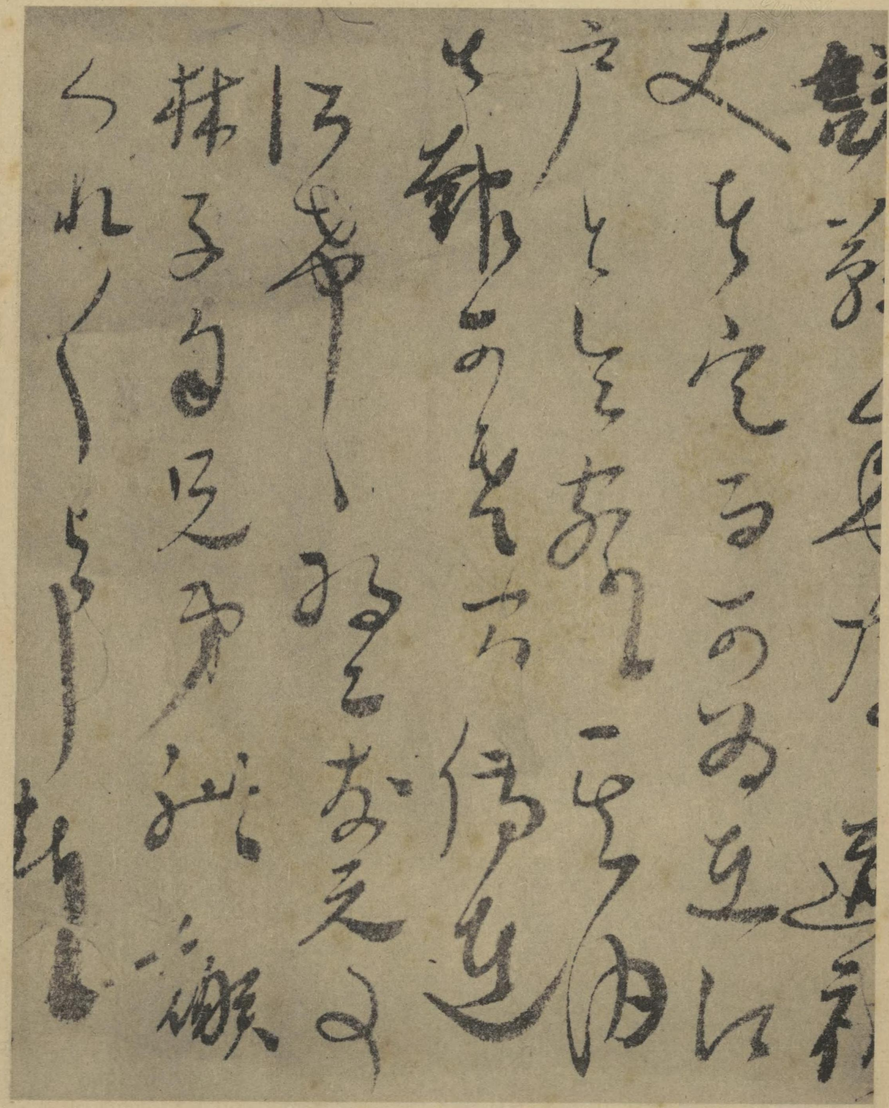


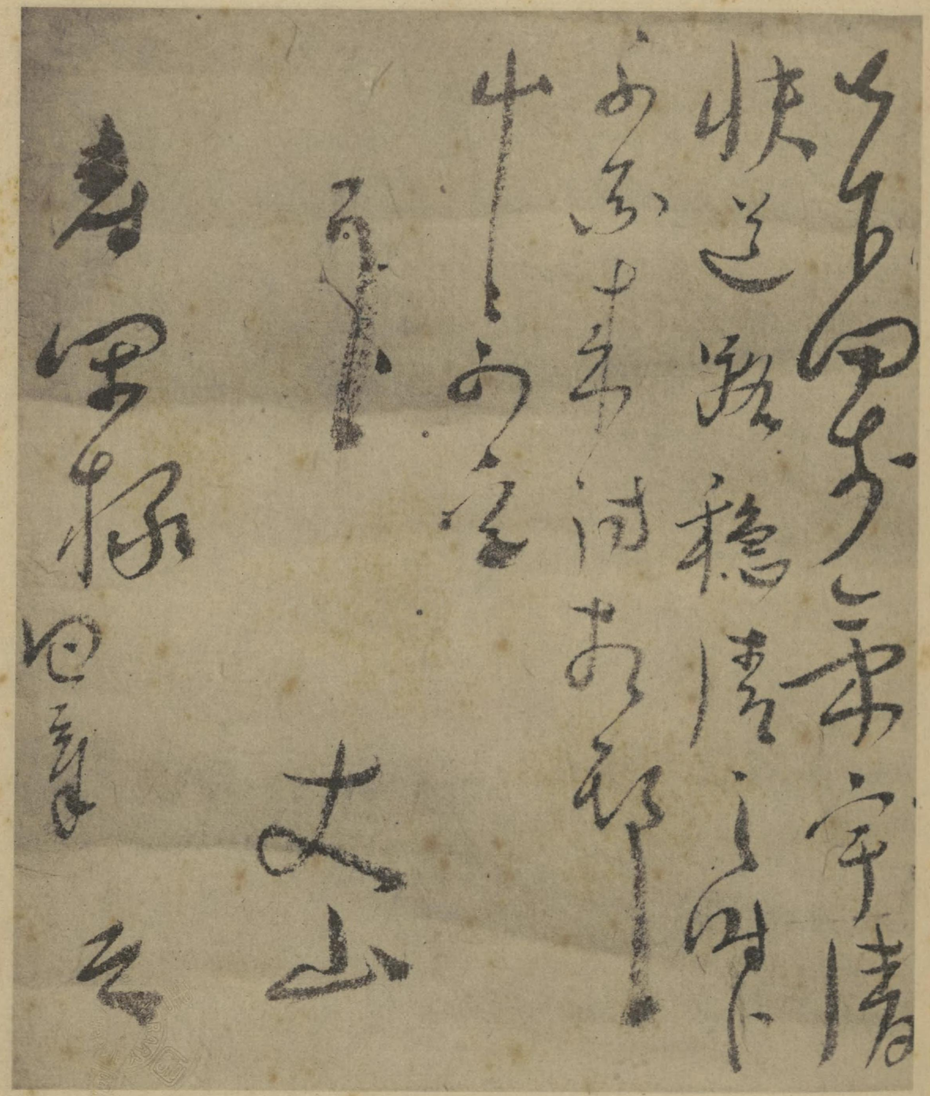




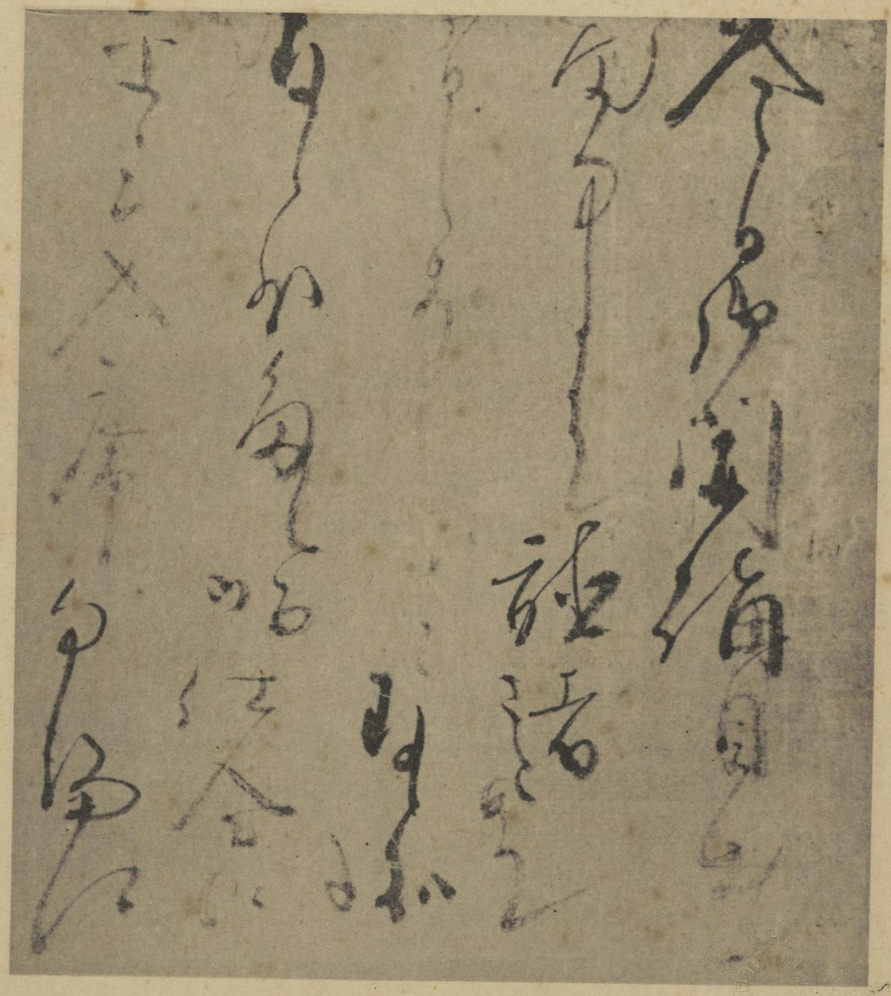


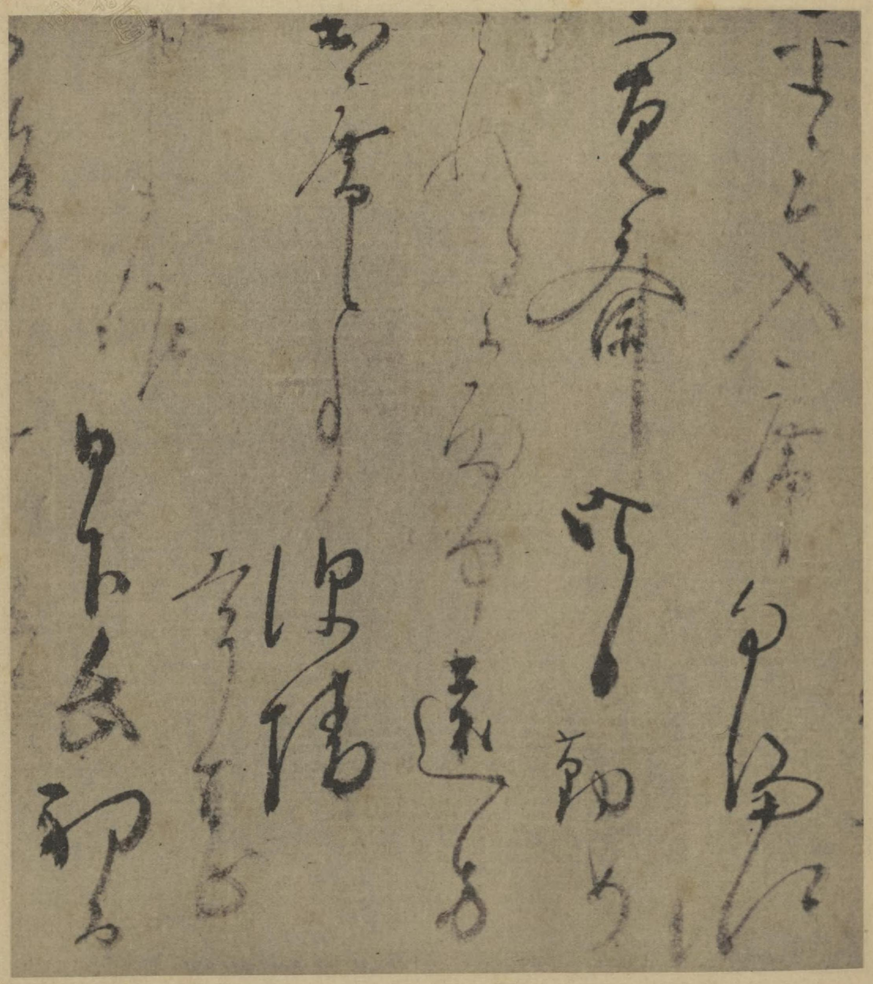


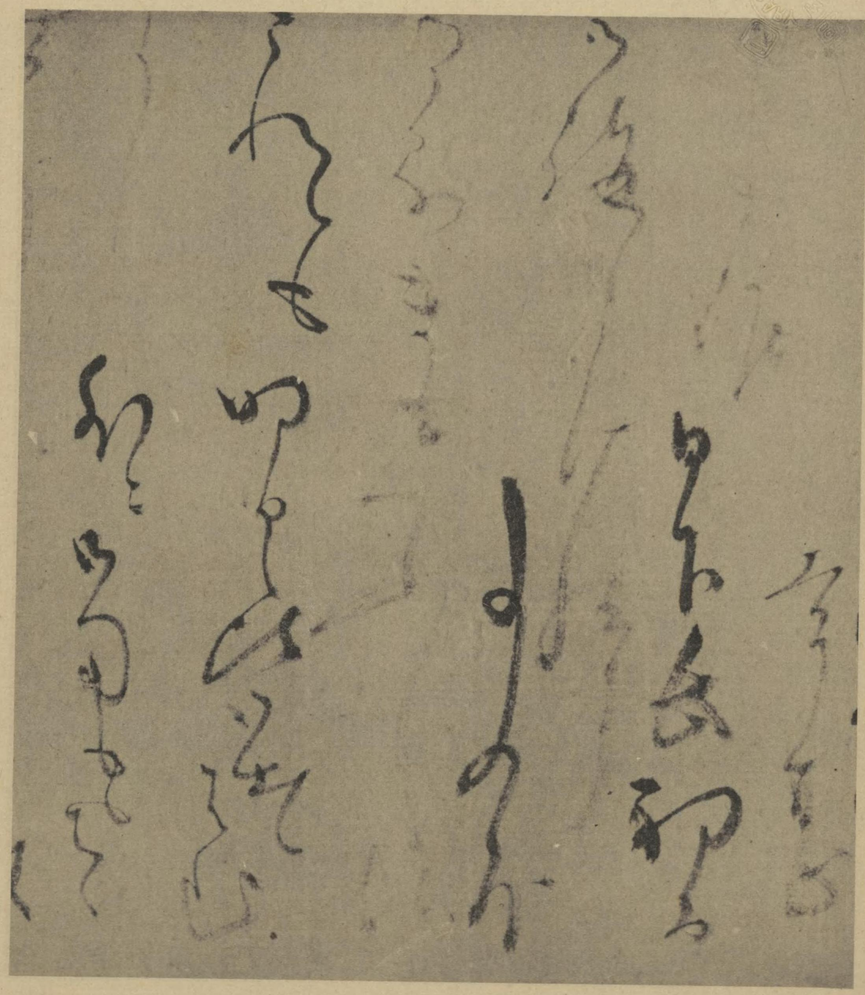


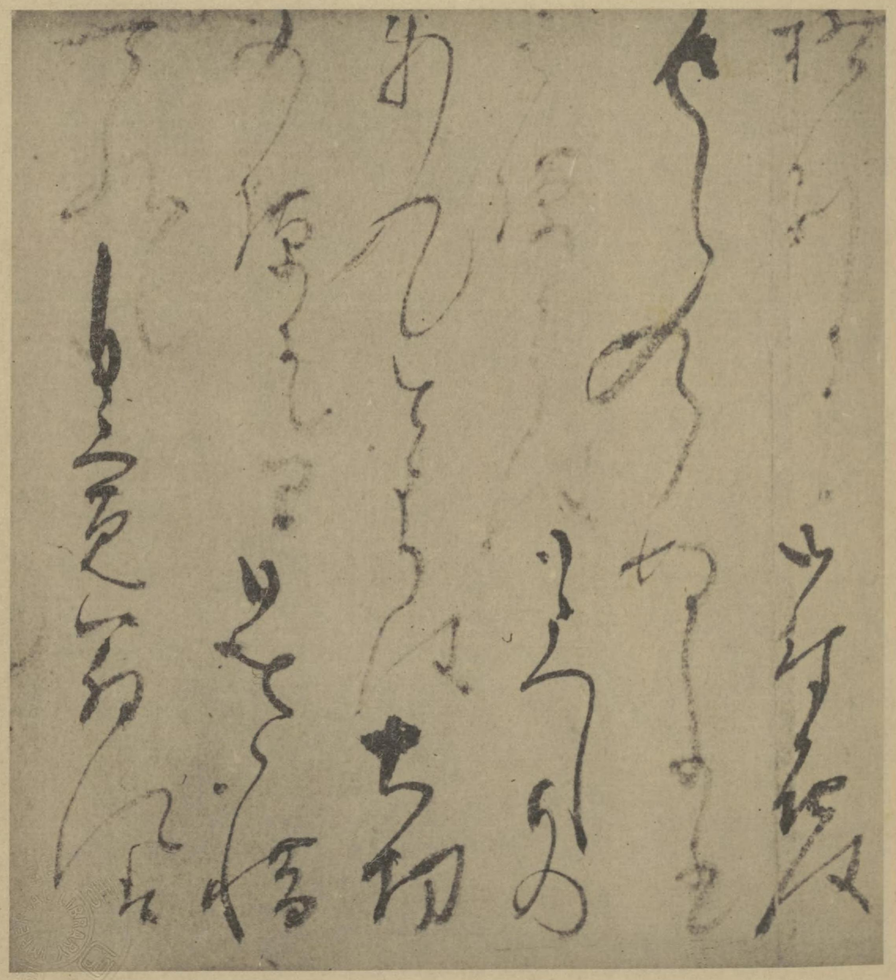


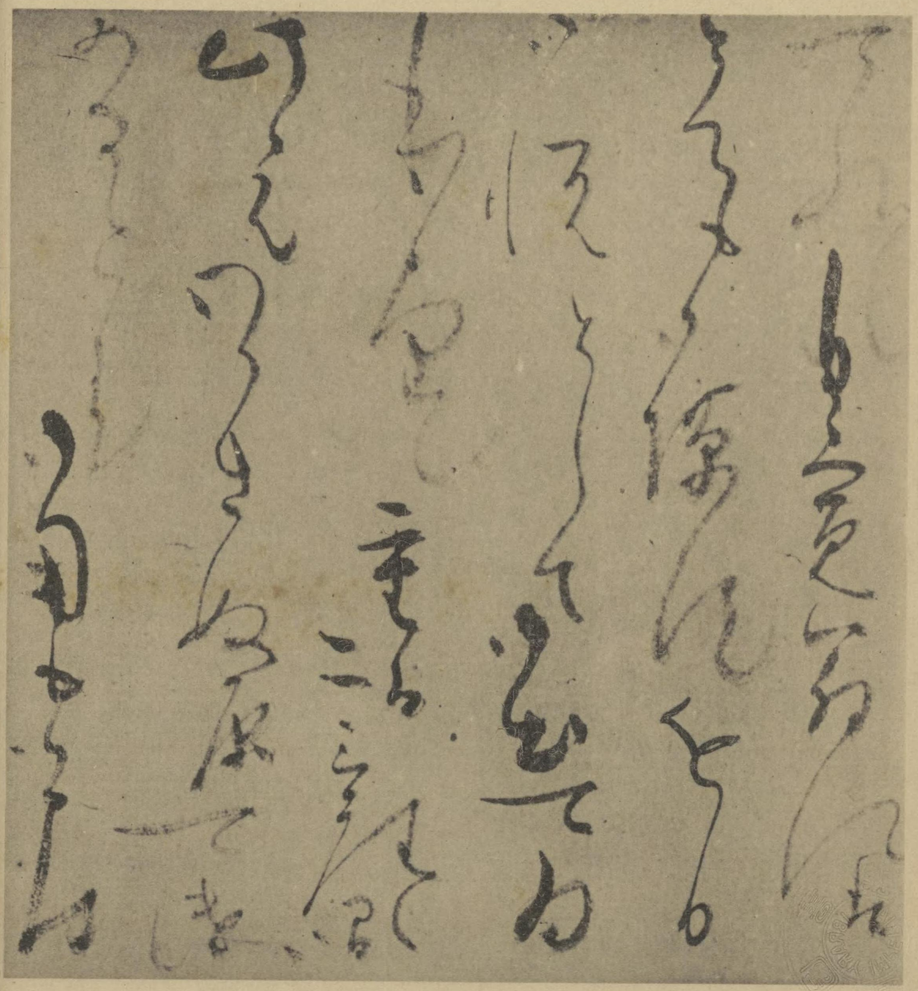
七 新井白石書狀

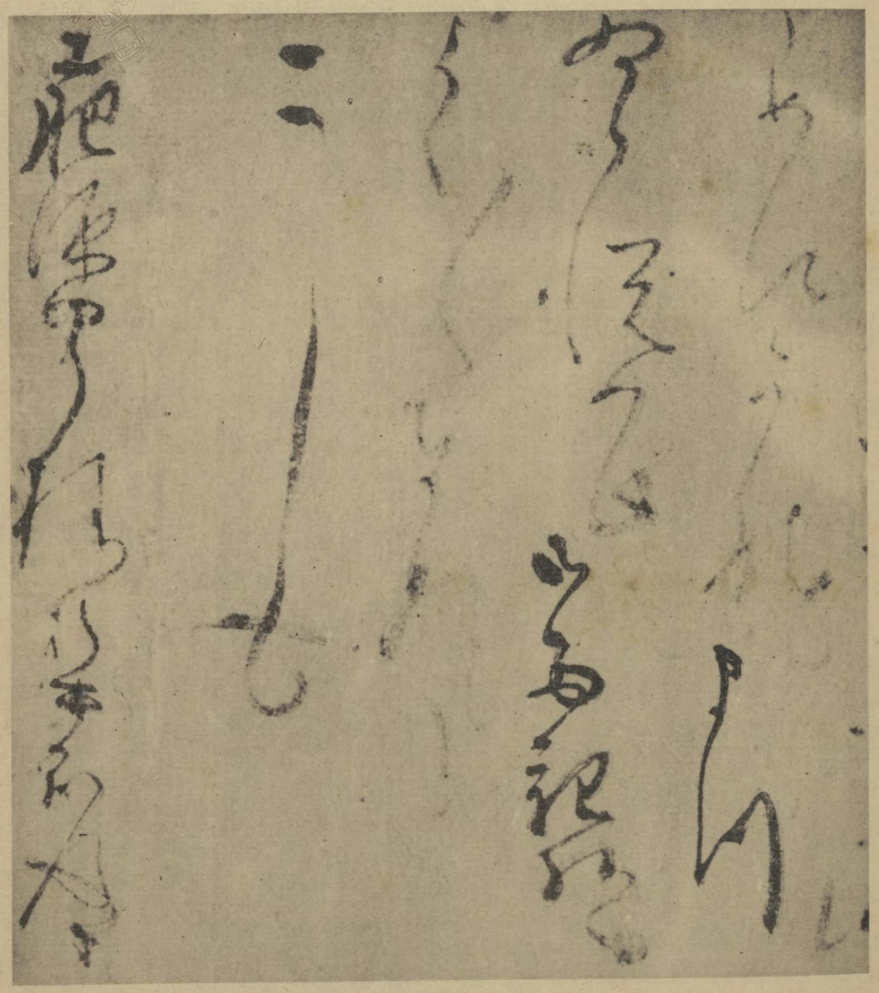


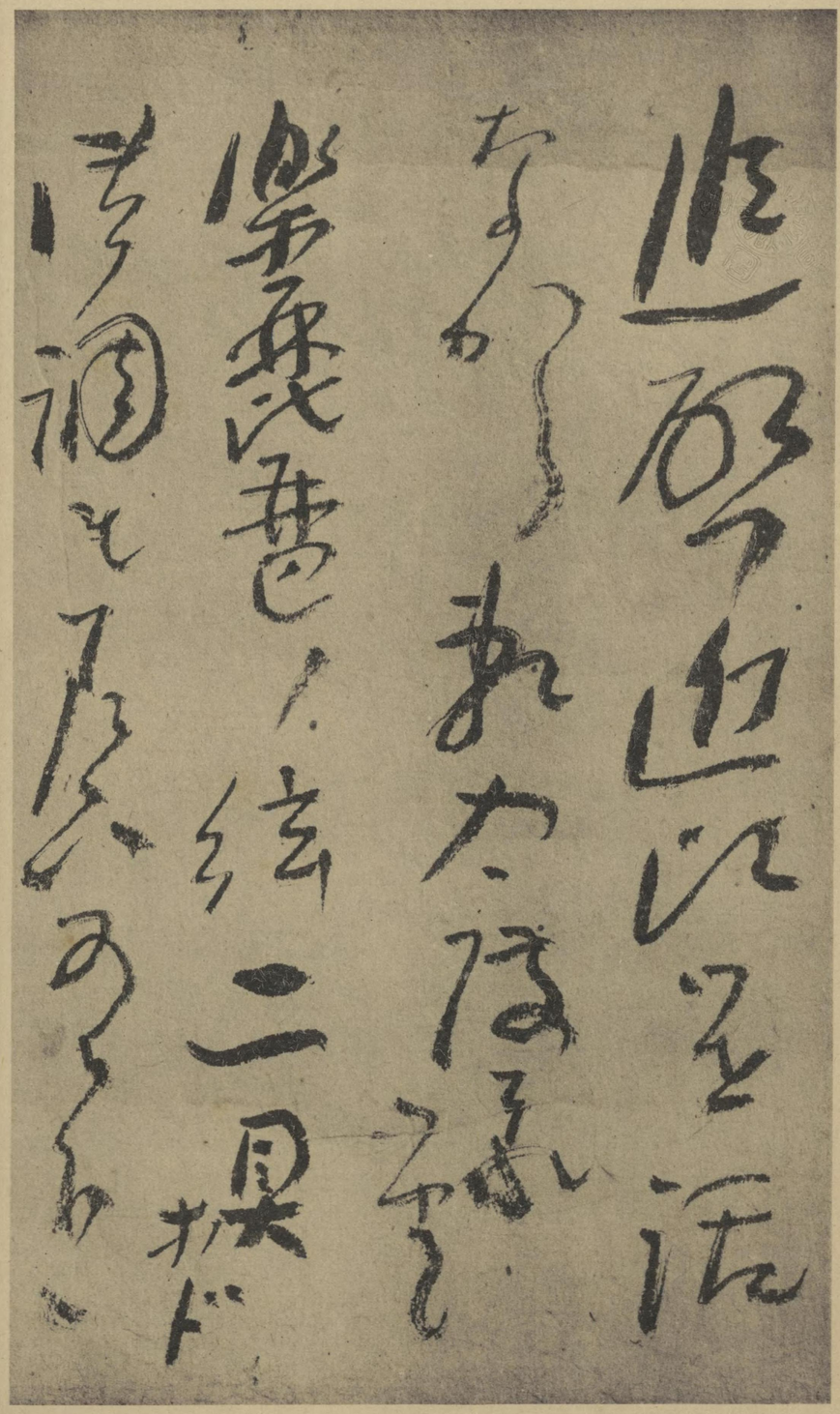


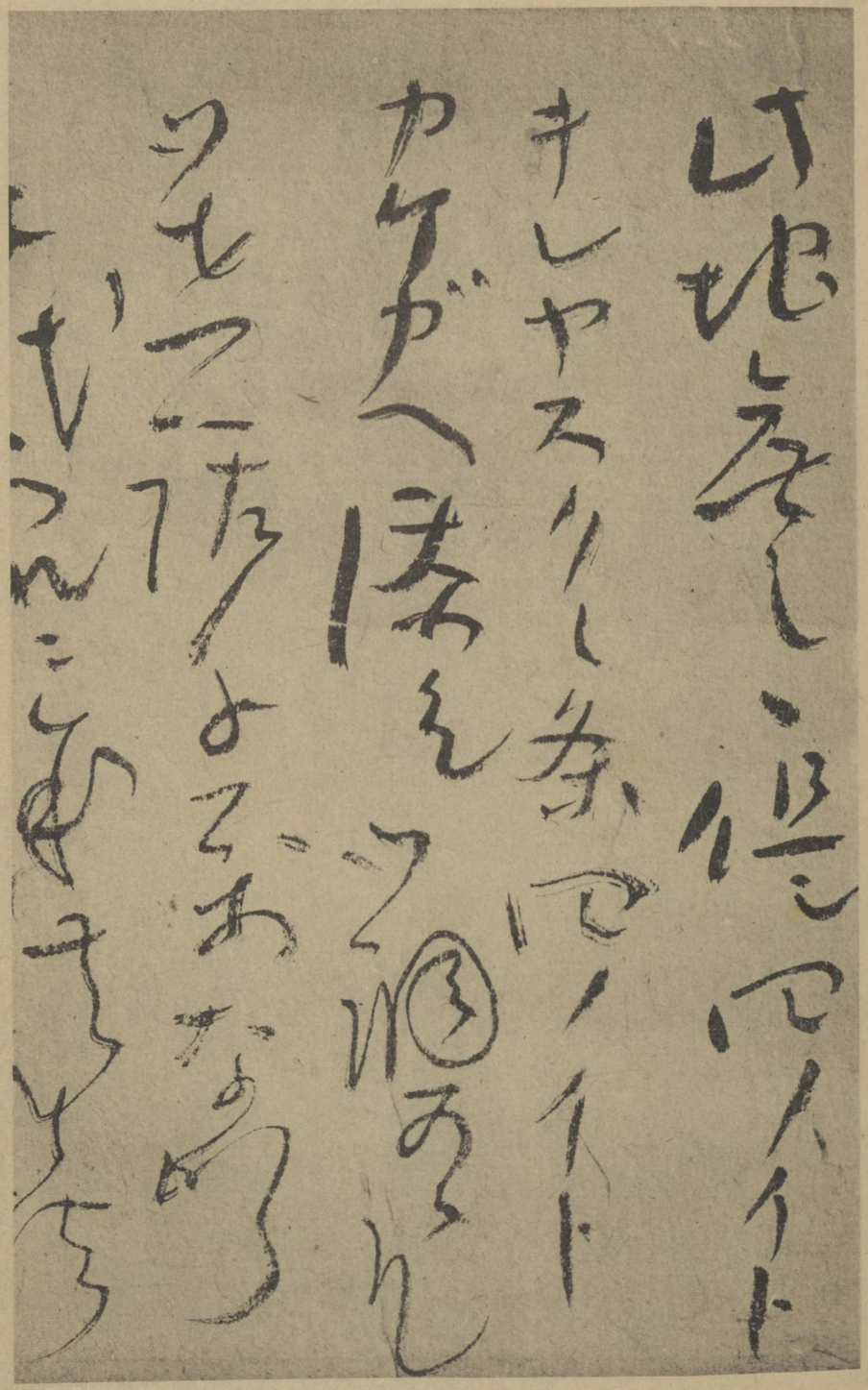


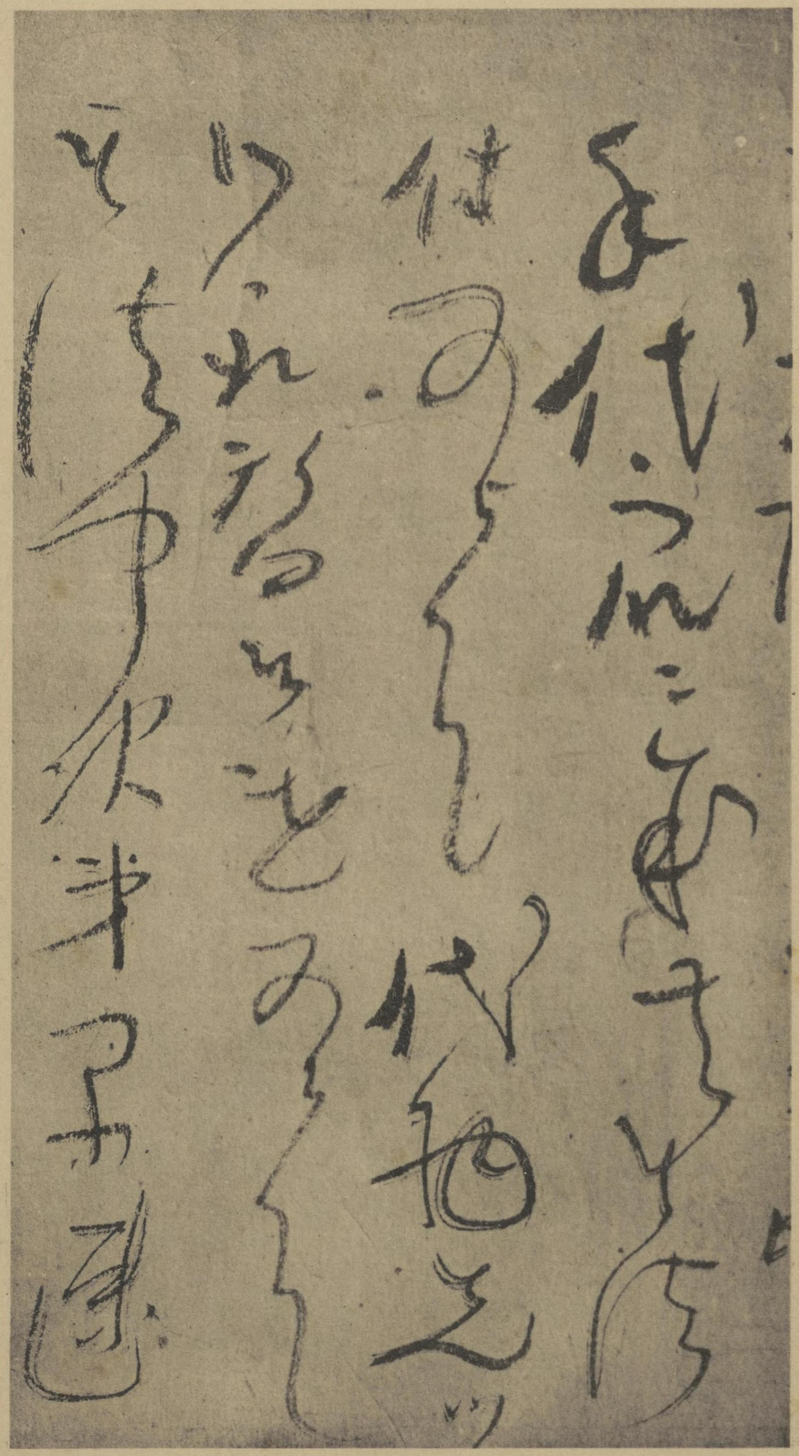


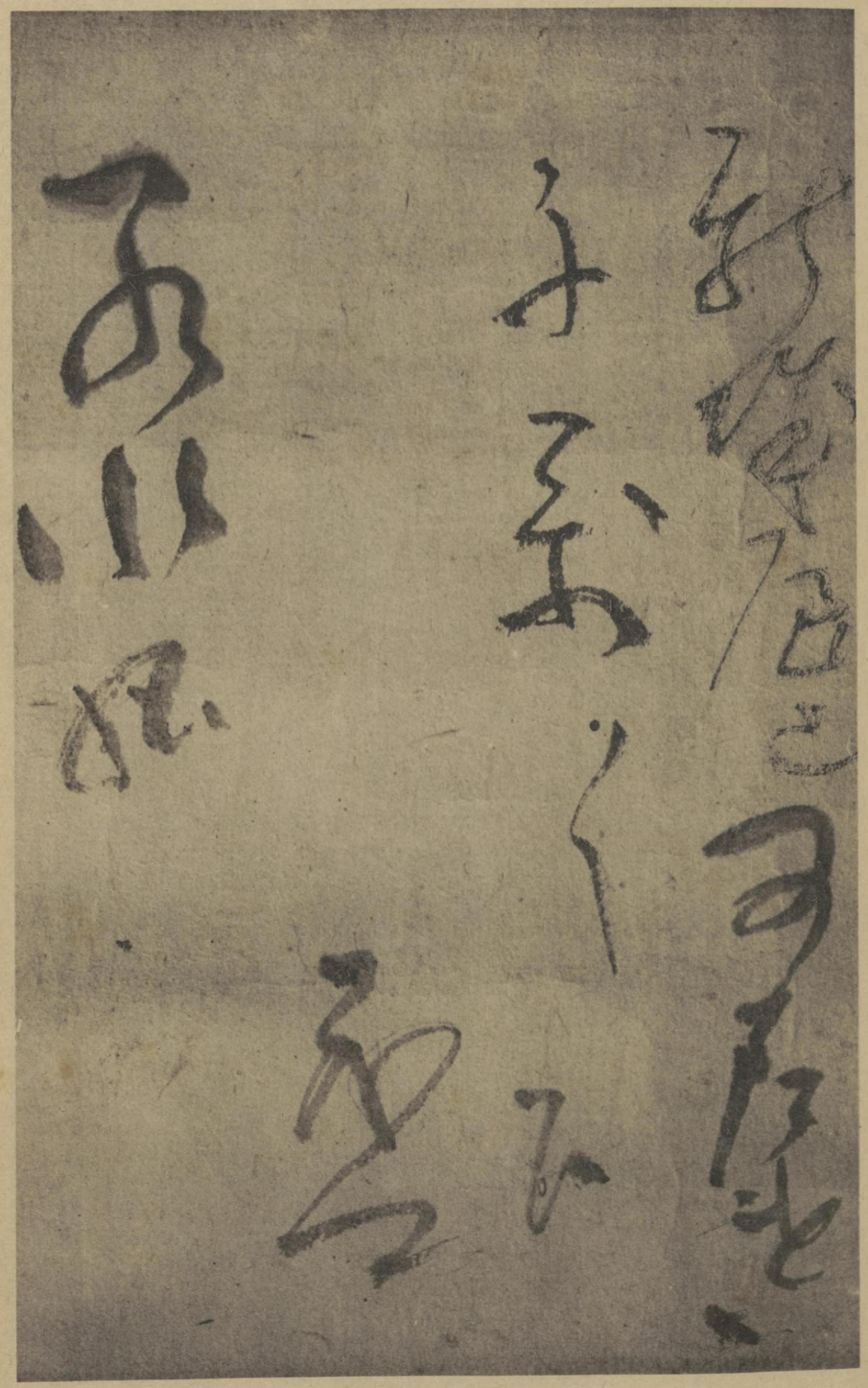


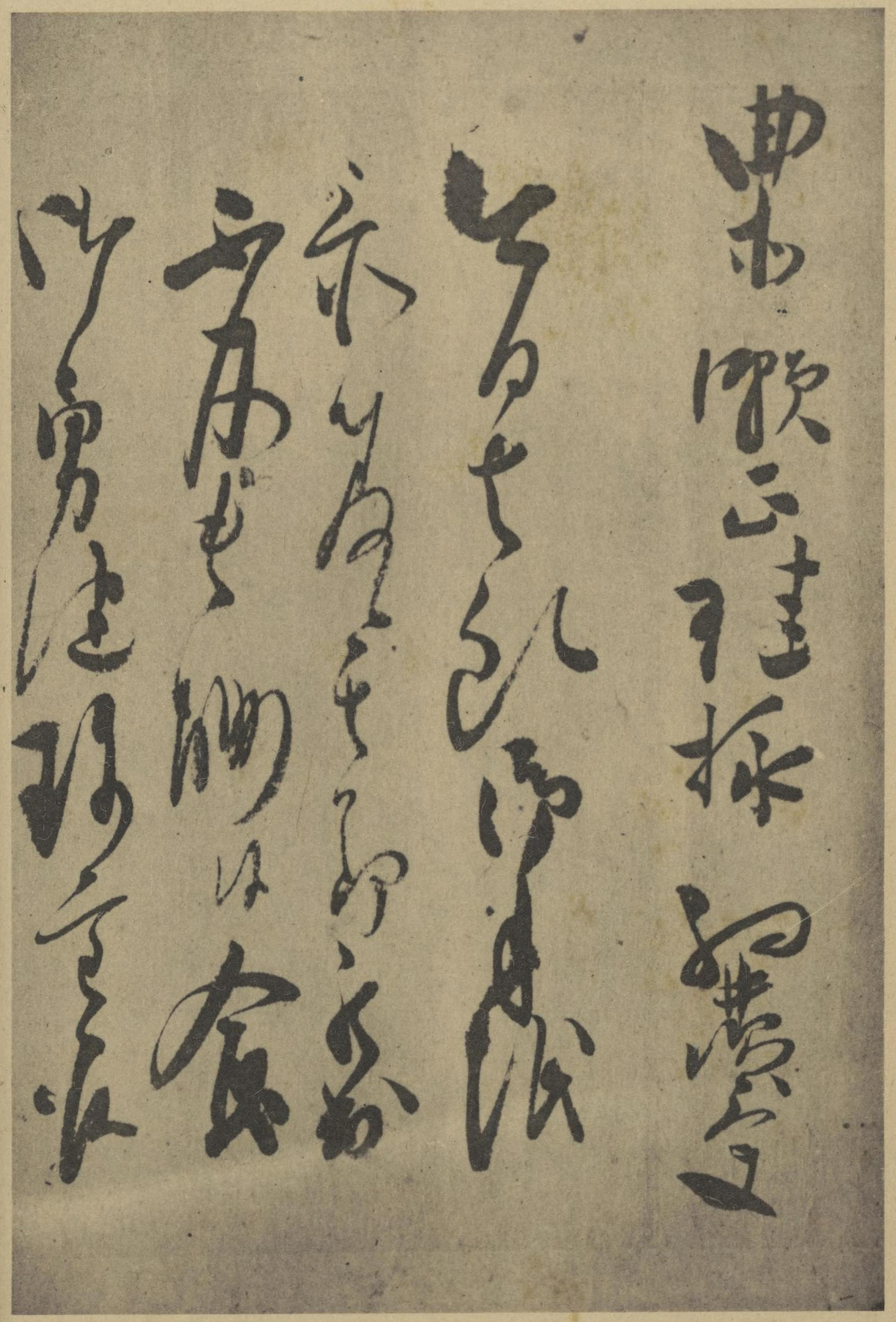


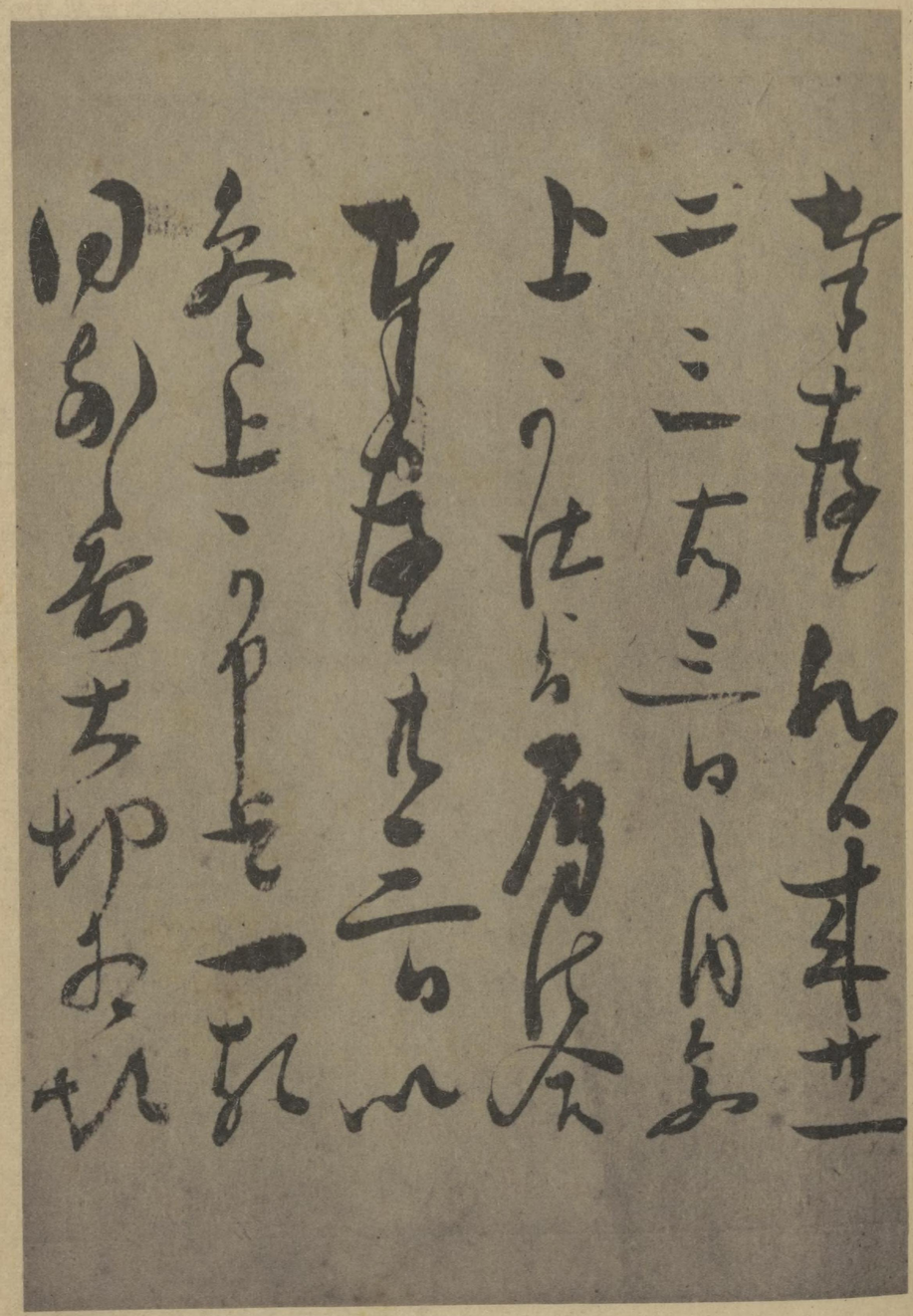


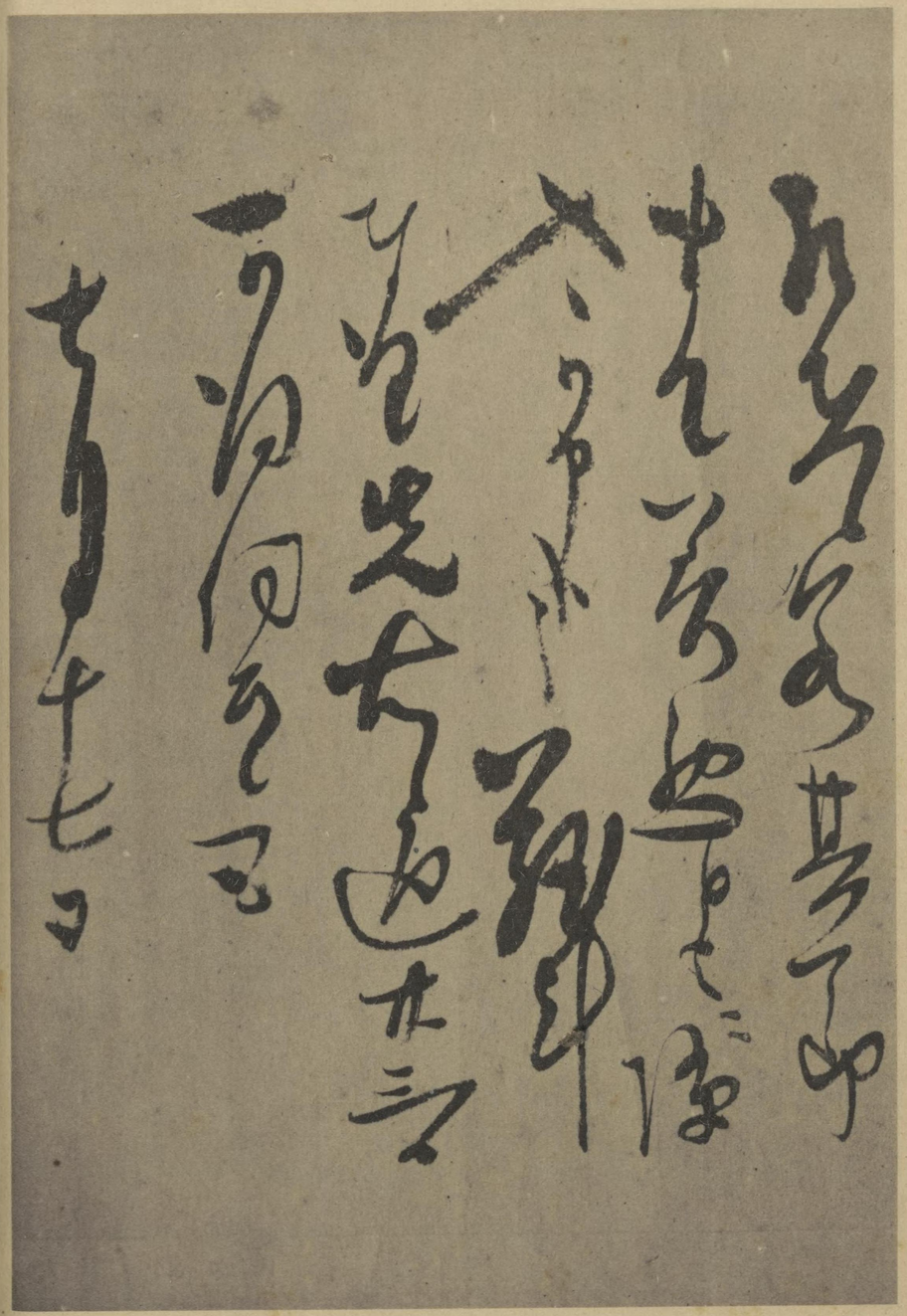




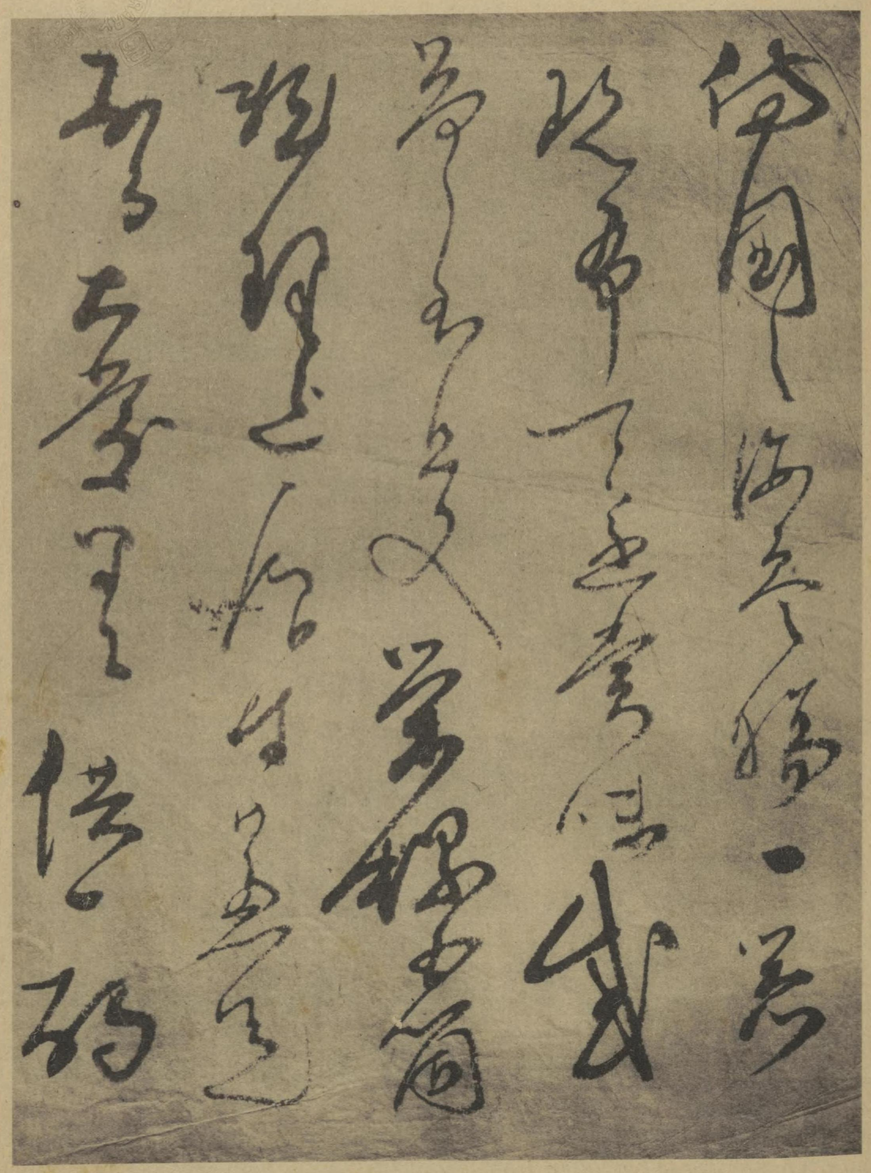


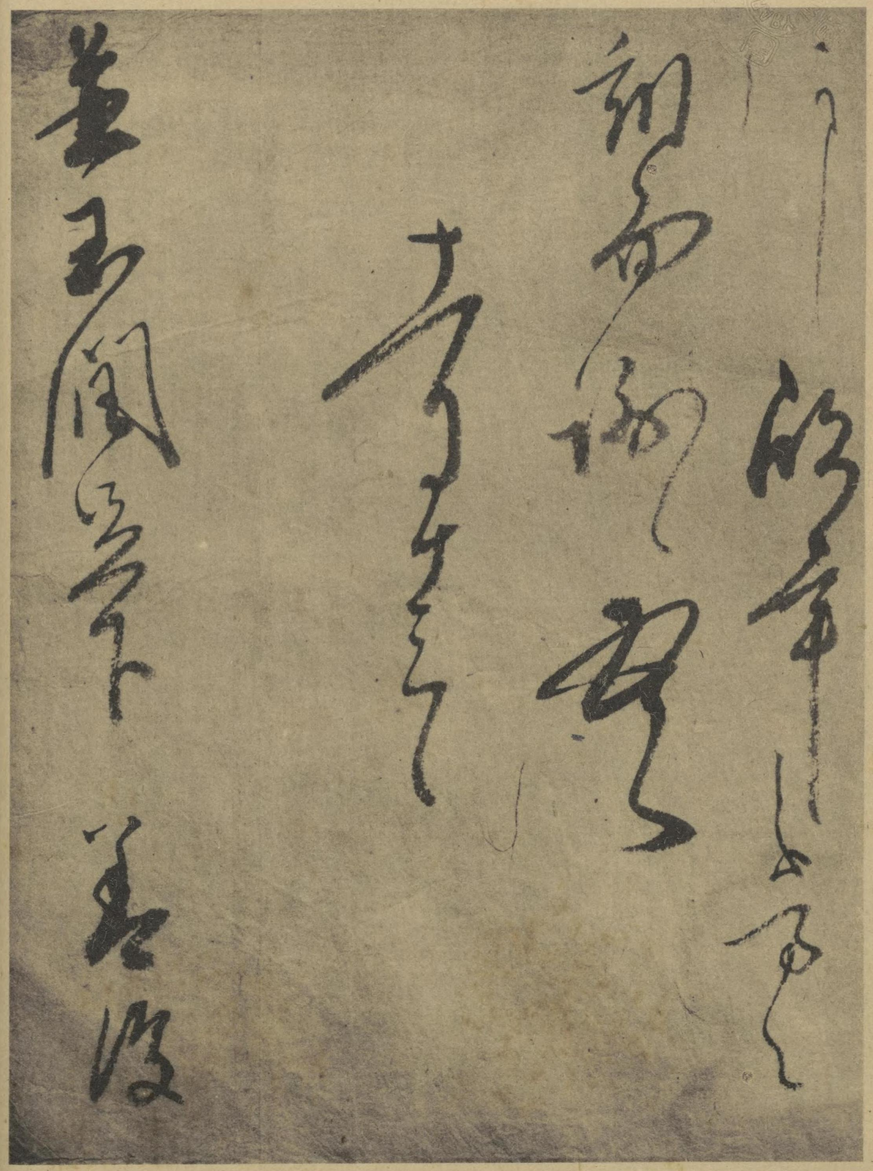




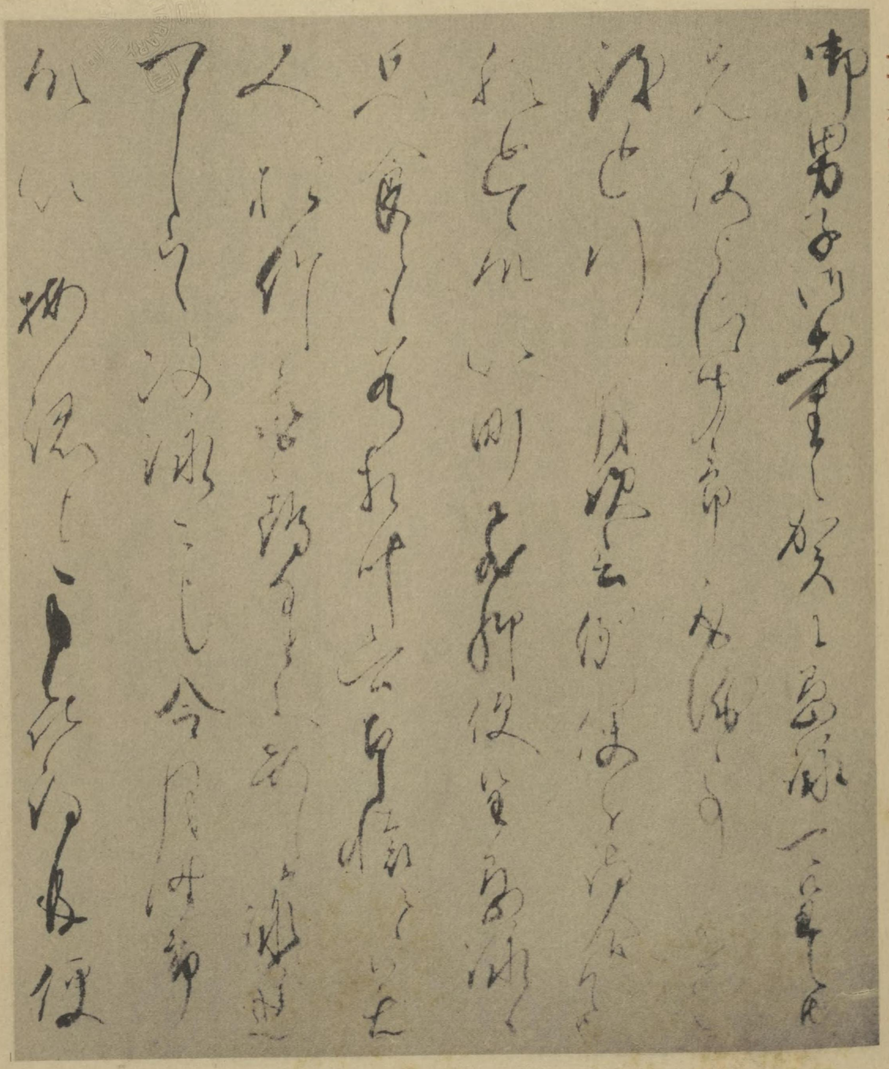


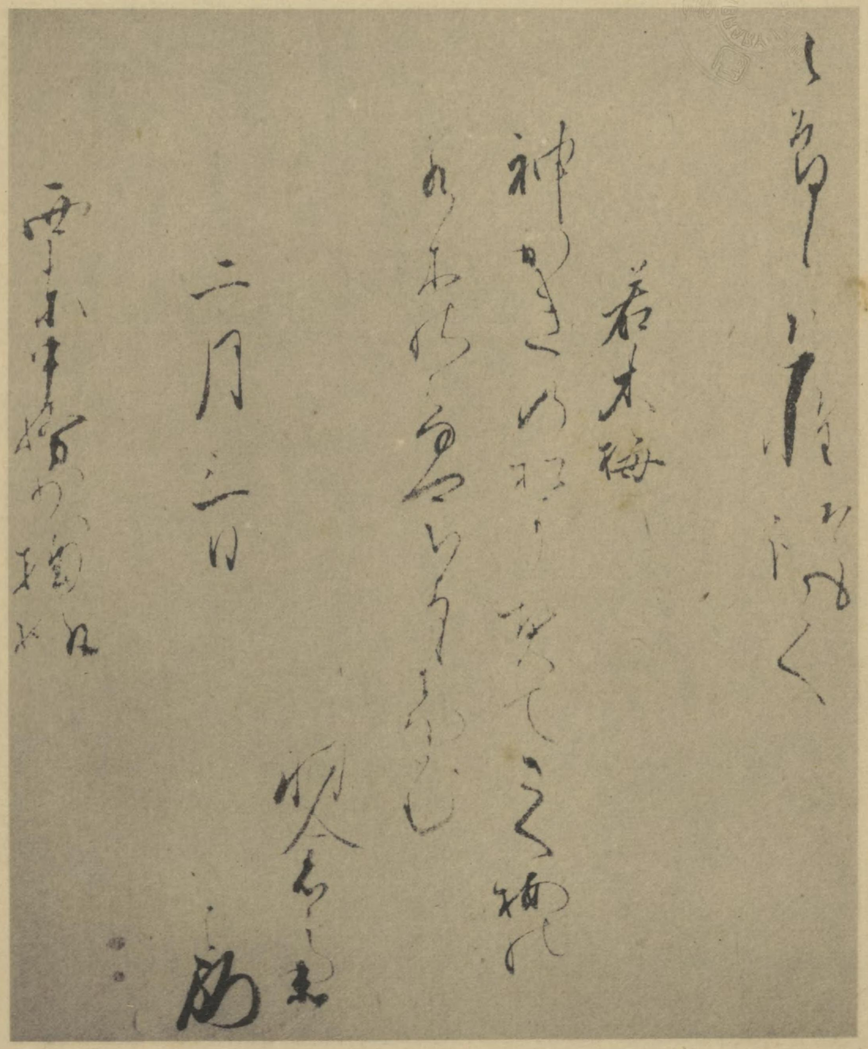
一〇 中井竹山書牘

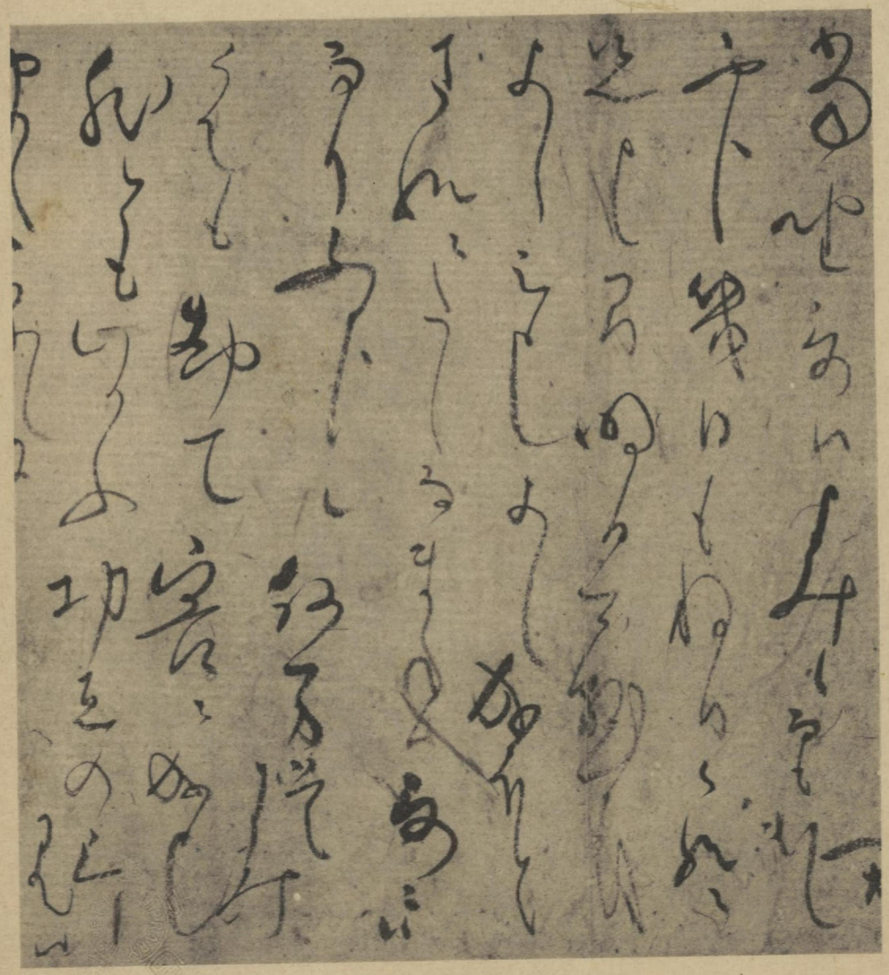


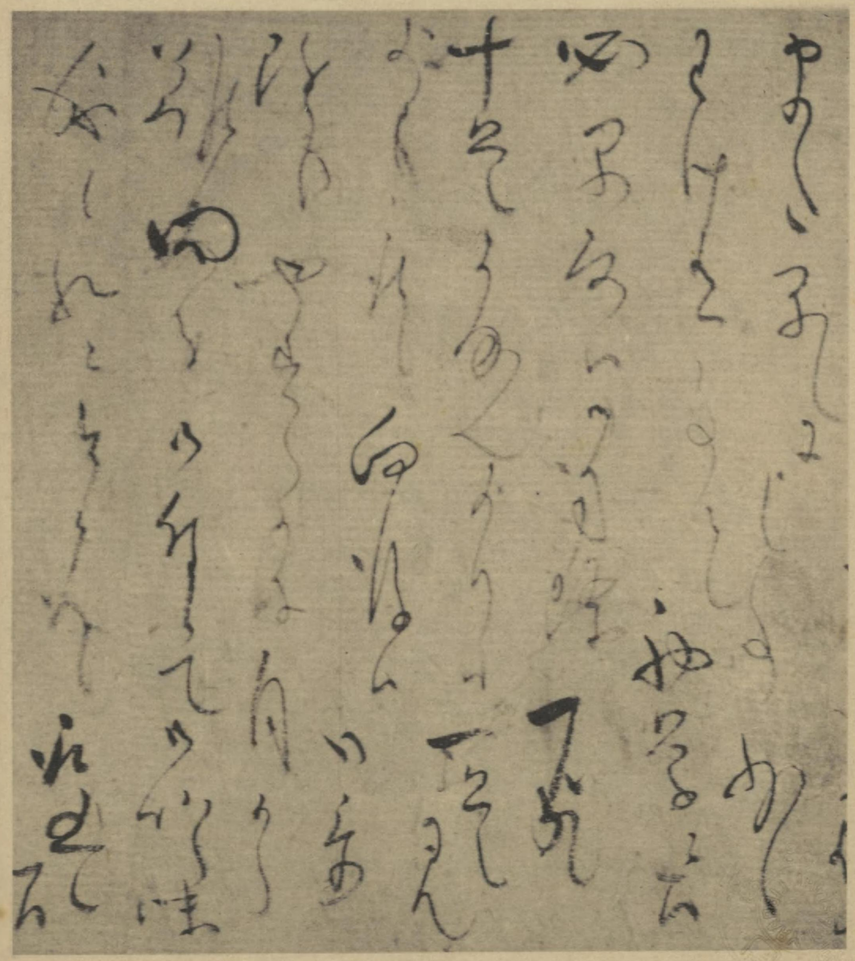


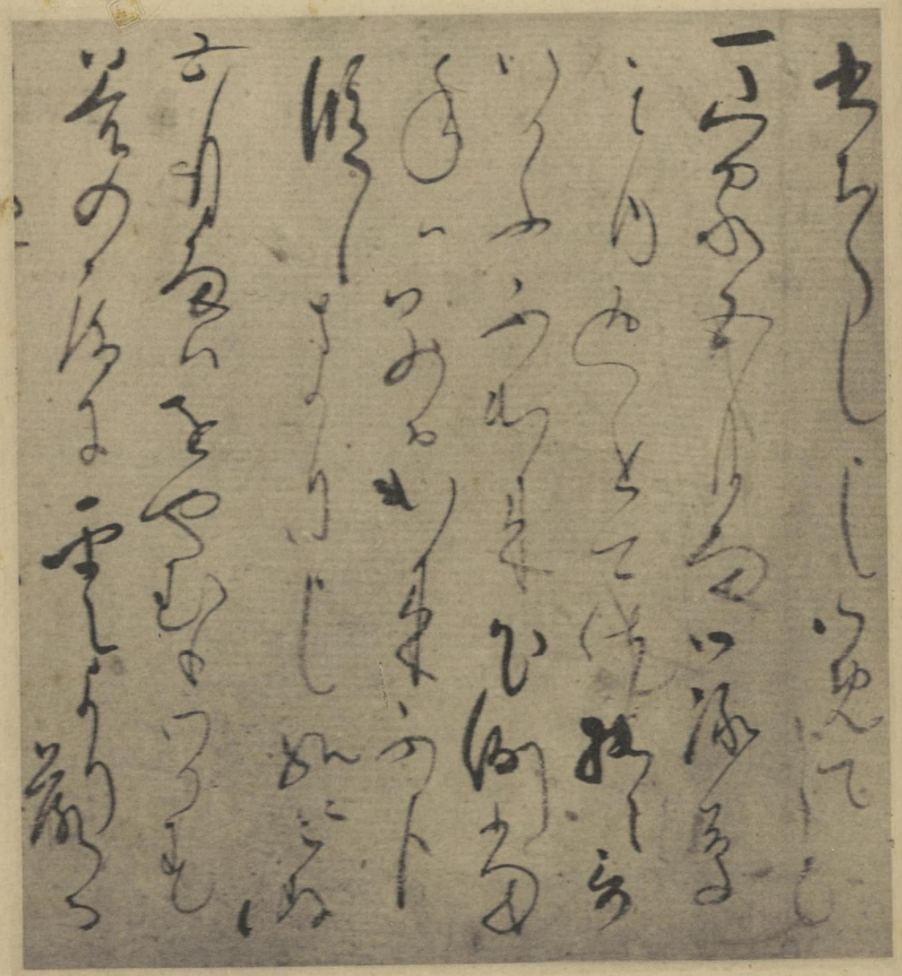
二　荷田春満書狀

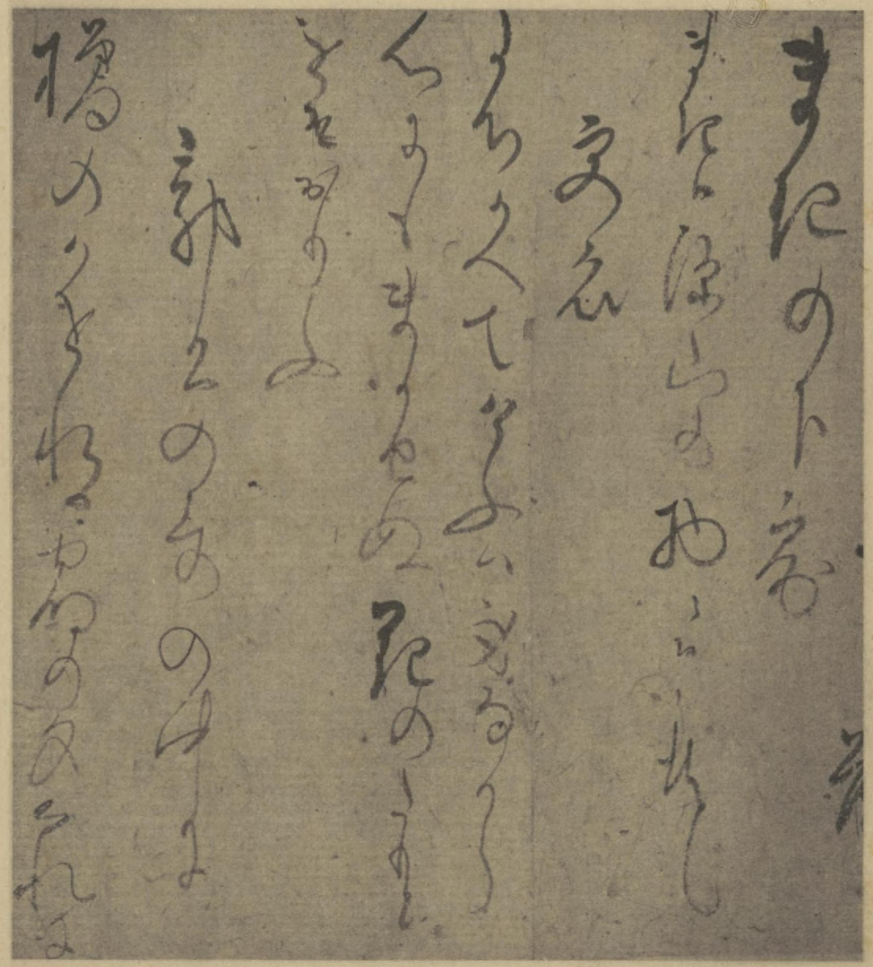


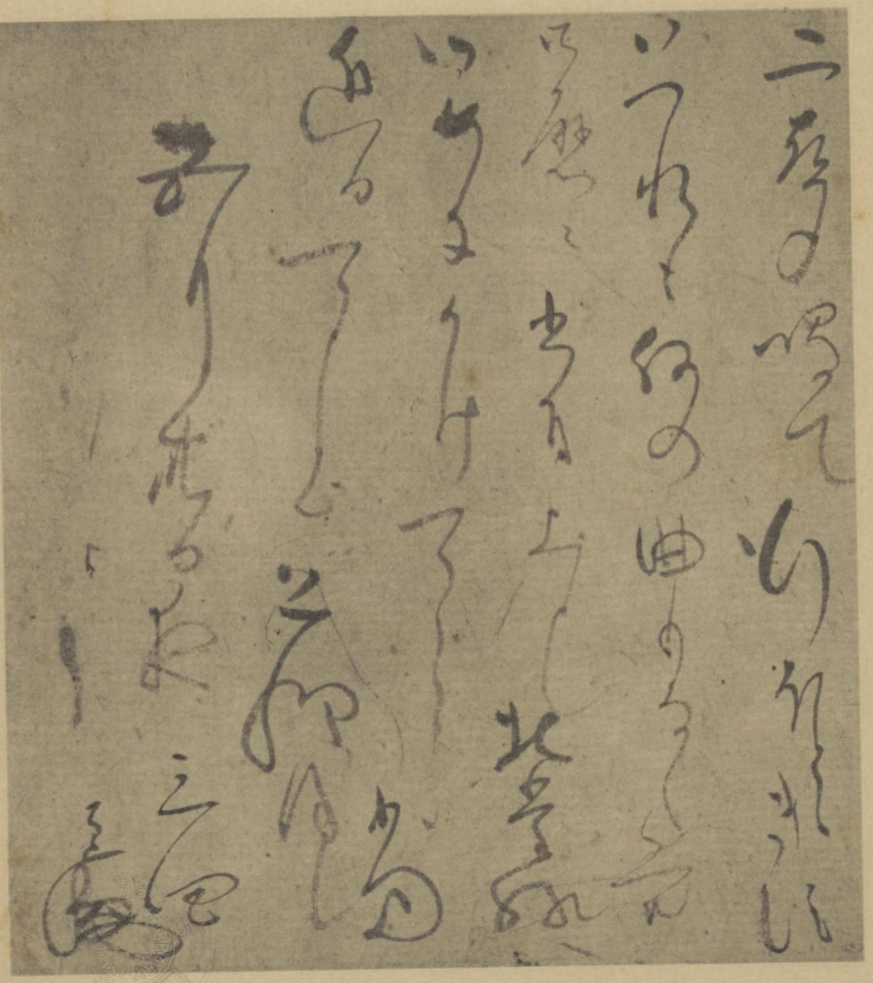




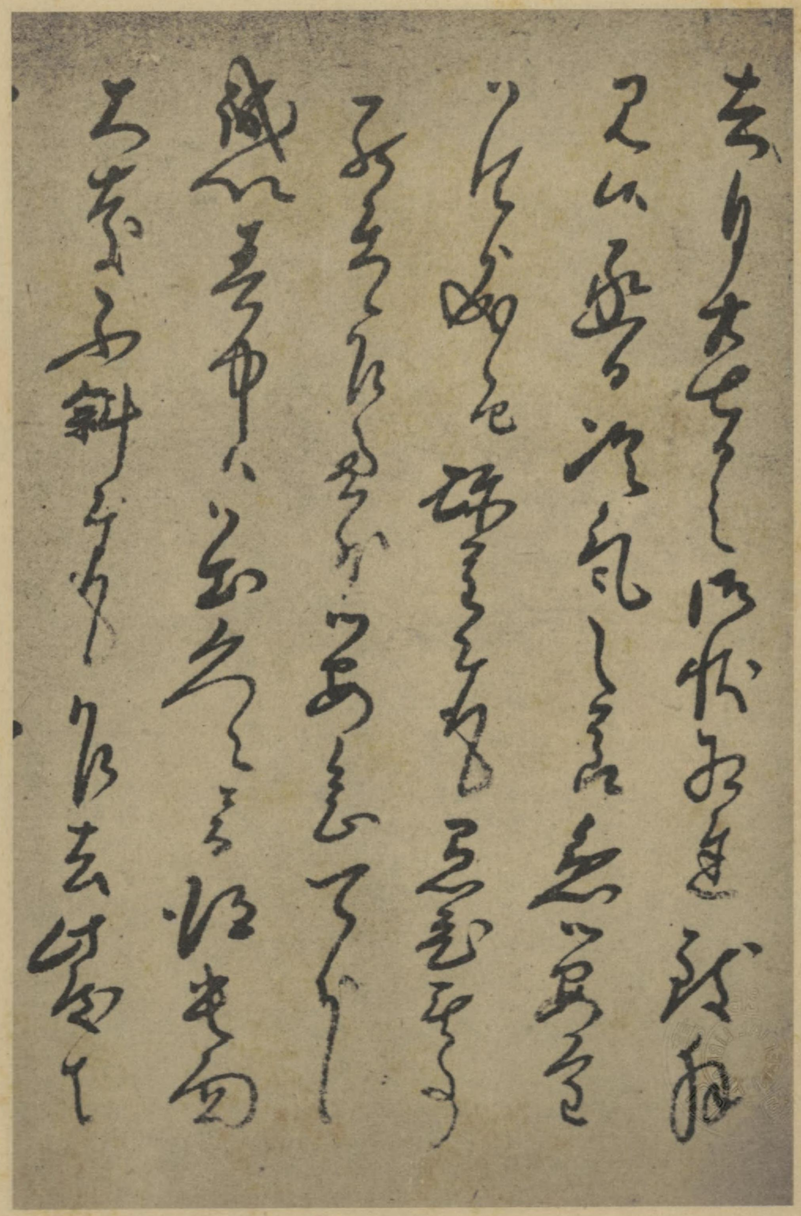


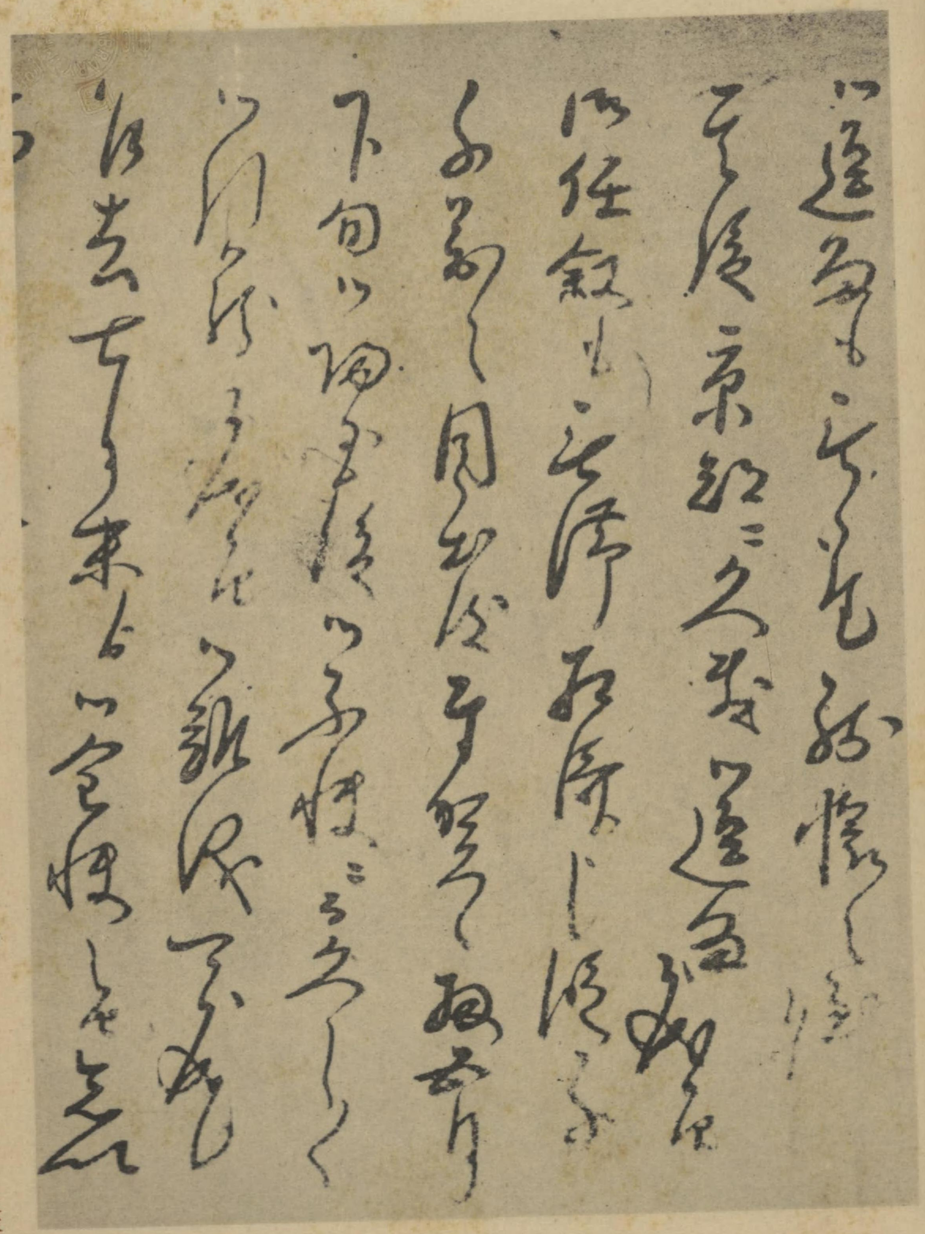


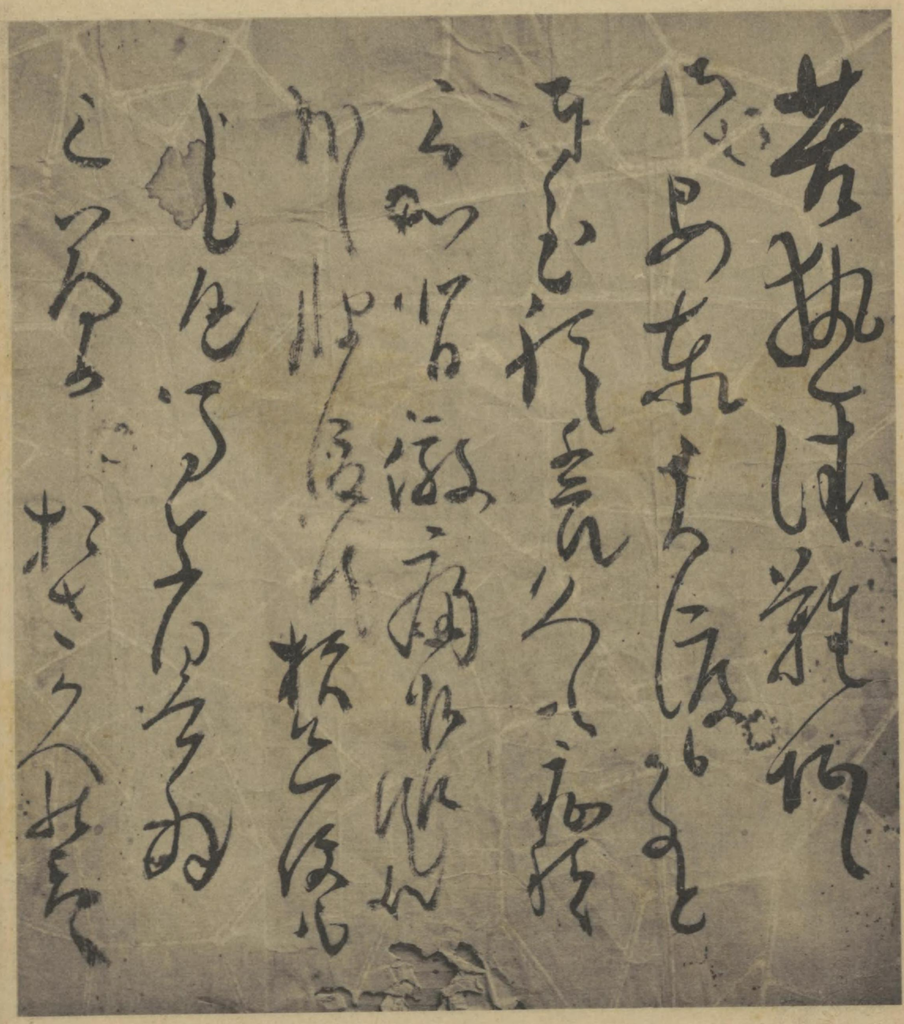


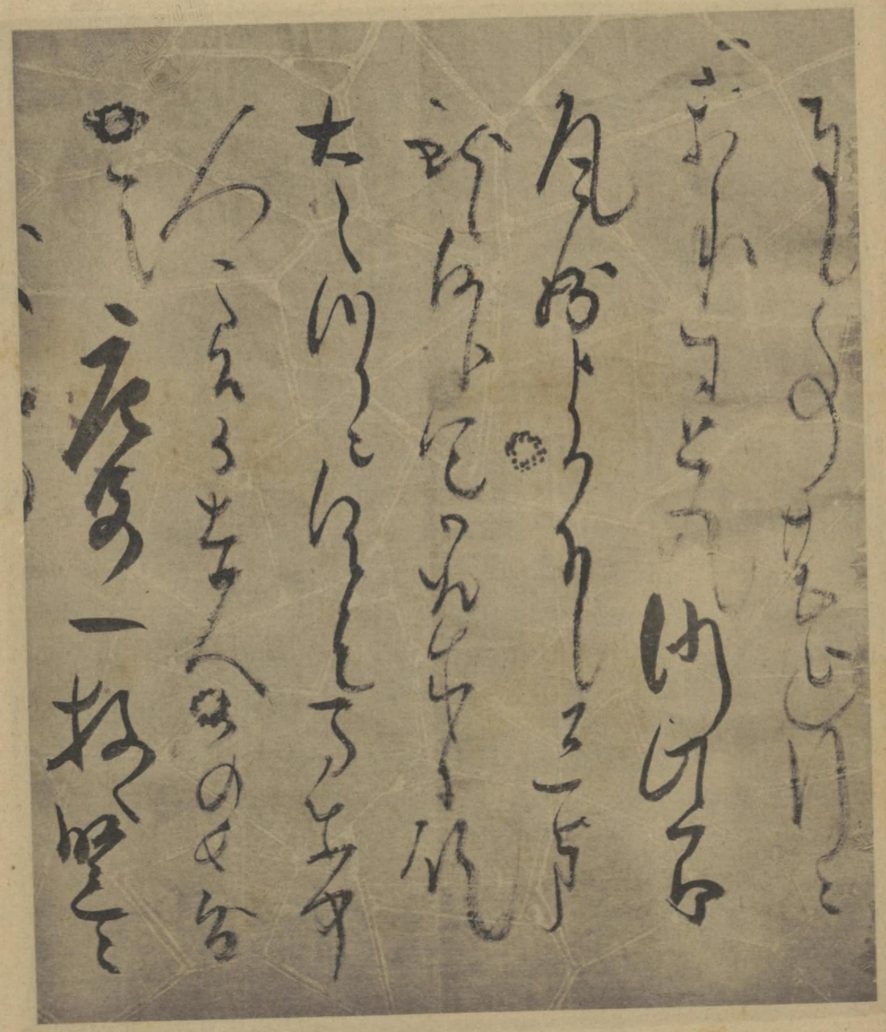


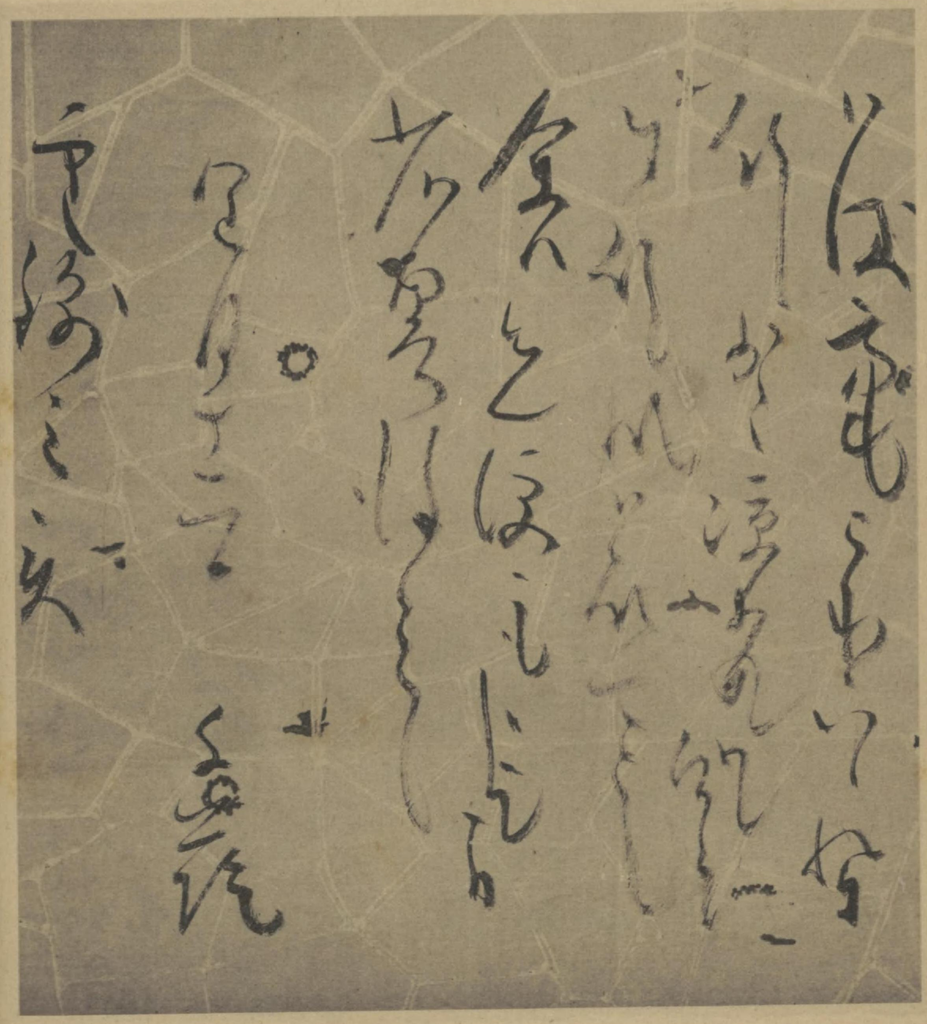
一三　本居宣長書狀

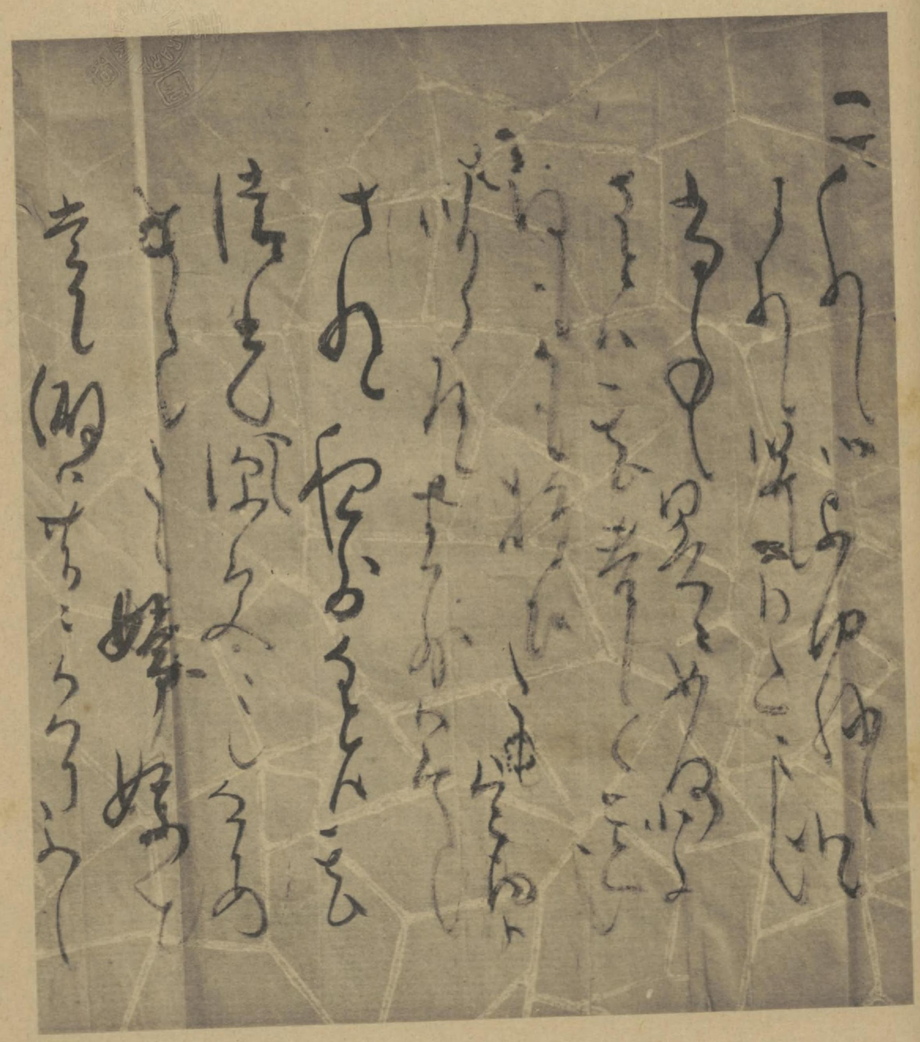












續書狀集解說

岩橋小彌太

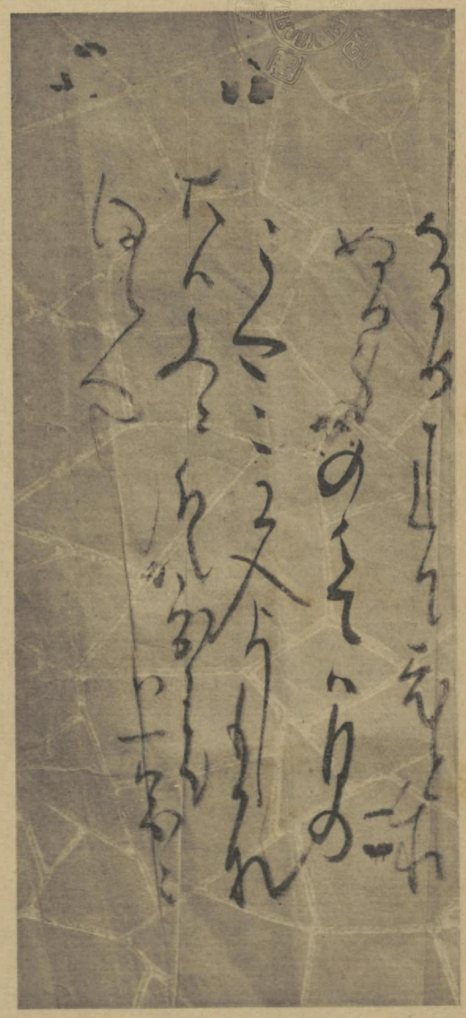
曩に名筆全集の一篇として書狀集を編し、僅に室町幕府時代までの書狀を收め得たのみで、近世の書狀は他日の續編を期したのであつたが、今卽ち其の機を得て、茲に前篇に漏れた所を補はふとするのである。近世文運の勃興と共に、書家輩出し、名筆雲の如く出たのみならず、其の筆になる所の書狀も甚だ多く遺されてゐる。從つて本集の材料を得る事は決して困難ではなかつたが、限られた紙數に適當に收める樣に、近世名家の書狀の尤品を選擇するには甚だ困難を感じたのである。加之近世の書狀は人文進み、世事繁多となるに從つて、內容次第に複雜を加へ、蠅頭の細字を以て克明に記したものがあり、或は丈餘の卷紙に長々と書かれたものがあつて、其の書を鑑賞する爲めには適宜に擴大し、且つ數紙に亘つて截斷してこれを收めなければならない始末で、遂に近世名公の內最も代表的なものに就いても、其の十の一をも採取する事が出來なかつたのは、已むを得ない事とはいへ、遺憾の至である。

卽ち本篇には近世初頭を飾る近衞信尹、瀧本坊昭乘、本阿彌光悅の三筆を始め信尹の子信尋僧家では大德寺の澤庵、儒家では石川丈山、新井白石、荻生徂徠、細井廣澤、中井竹山、國學者では荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、加藤千蔭、都合十四名家の書狀のみを收める事が出來た。其の他の名筆及び化政時代以後に輩出した多數の人口に喧傳せらるゝ大家のもの等、凡て一切割愛せざるを得ない事となつた。今は已に續々篇を期する事は不可能であるから、是等は遂に永久に本全集に集め得ないことを遺憾に思ふのである。

一　近衞信尹書狀

近衞信尹の書風は近世の初頭に最も廣く行はれたものである。信尹の父前久は青蓮院尊鎭親王に書道を稟けて書名高く、信尹は其の家に生れ、且つ攝家の嫡流に出て門地貴く、左大臣に任じ關白に補せられたから、自然に世の尊信を受け、爲めに其の書風も一世を風靡したものであらう。上は後陽成天皇を始め奉り、將軍では德川秀忠、大名では伊達正宗、細川忠興など皆其の影響を受け、幕府の右筆和久是安も其の門から出たので、一般に其の風に傾いたのである。三藐院と號したから世に其の流を三藐院流或は近衞流などゝいつた。書蹟は勇勁にして枯淡頗る奇癖に富んでゐる。書名の高いのに比して必ずしも美しいものとはいへない。彼は始め信基と稱し、尋で信輔と改め、更に慶長四年に此の名に改めたので、此の書狀は未だ信輔と言つた頃卽ち壯年時代の最も爛熟した筆蹟で、未だ後年の如き惡癖の甚しくない時分のものである。原書は折紙に書かれてあつて、其の釋文を示せば、

猶々目安を被ニ
差越一事奇特之
昨日之目安之通



余?にて候。〳〵。

再三遂二披見一候。

尤之事共候。其上にも、思寄候通ハ以二時分一面之時可レ令二談合一候。先心中之通、伯耆に申越候間、とかくに可レ然様、馳走頼入迄候。かしく。

十月朔日（花押）

木周防殿

宛名の木周防とは、史料編纂官高柳光壽君の考證によると、木下周防守延重で、文中の伯耆は杉原氏、共に豊氏の類族である。文意は明であいが、延重が信尹に頼つて何等かの願意を遂げようとしたのに對して答へた返信であらうと察せられる。

二　近衞信尋書狀

信尋は後陽成天皇の皇子、信尹子なきによつて養ひて嗣とした。薨髪して本源自性院と稱し、應山と號した。此の號によつて廣く世に聞えてゐる。公の書は最も三藐院に酷似し、往々識別する事が困難な程である。此の書狀も古くより三藐院の書狀と誤り傳へられて來たのである。唯公の書は三藐院流の奇癖を一層甚しくした感がある。概して書風を模するものは、其の癖を倣ふ事に力めるものであるから、神髓を傳へたといはれるものは、多く最も巧に其の癖を模したもので從つて書風を模するものは益其の癖を甚しくする傾向がある。元祿寶永の間、豫樂院近衞家熙の書が廣く行はれたが、其の子家久は父の書を習つて、極端に其の癖を甚しくした。應山公は三藐院の書の骨髓を得て、往々鑑定家をして誤認せしめるが、概して惡癖の甚しいものを應山公の書と見て大差がない様である。此の書狀は竪文に書かれて、

昨日者きせる五本
送給令二祝著一候。殊更
様子とも驚二目計一候。
猶近江申候へく候。
かしく。
神無月八日
松越州（花押）

とあり、卽ち煙管の贈遺を謝したもので、宛名の松越州は、史料編纂官井野邊茂雄君の說によると、細川(松平)越中守忠興と見るのが最も常識的であるとの事である。

三　瀧本坊昭乘書狀

瀧本坊昭乘は卽ち松花堂惺々翁で、東求院近衞前久公から入木道を承け、且つ大師様を學んだ。三筆卽ち三藐院及び本阿彌光悅と共に何

れも筆癖の多いもので、人によつては隨分好惡様々であるが、唯消息は他所行の書でないだけに、却て癖がなく、流石に其の能筆に感心せしめられるものがある。原書は竪文で、亂筆の內に俊豪なる筆力を示し到底凡人の企て難いものである。其の文言は

面上に可レ得二御意一候。喜右葬禮に
あひにきのふ歸山仕候間。一書如レ此候。
先日良善かたへ御懇書
初松御無事候哉。御事傳頼存候。
忝存候。茶筅師に自二
恐惶謹言。閏七廿四日（花押）
尾張様一拜領之御かたひら貳內
上様明日大坂御下向と申候。明朝淀へ
單物越候。請取申候。茶筅師筑後かたへ
御著座之由候。
相屆可レ申候。宿不レ存候間、來次第にわたし可レ申と存候。さて〳〵其後久不レ得二御意一、御ゆかしさ中〳〵申もをろかに候。このたひの御上には、旦那衆へ之住持續目に而御座候付、方々不レ得レ隙、うちつゝき京都に迄罷在候故尾張様へも京都に而御目見、伏見へは其後御見廻も不二申上一候。山城殿へも

右之旨御理申、京にて懸二御目一申迄に候。
貴寺切々御見廻被レ成候哉。若伏見へ
被レ成二御越一候はゝ、右之おもむき御取成頼存候。
神喜右事さてもおしき事ヲ仕候。
夢ノ夢に候。力おとし申候。何事も(袖ノ)

……瀧本坊昭乘……

光德様貴報

といふのである。「このたびの御上」といひ、又「上様明日大阪御下向」といひ、又「閏七廿四日」といふ日付といひ、どうしても寬永十一年の書狀であるに相違ない。此の年五月二十日將軍家光が江戶城を發し、七月十一日入洛、二條城に入り、十八日に參院、尋いで閏七月二十五日大阪に下向して市民に地子銀を免除し、且つ金子を與へたのである。卽ち御上といひ、大阪下向といふのはこれに當る。尾張様とは卽ち德川義直で亦將軍に從つて上洛し、伏見に館したのである。茶筅師筑後といふのは明でない。此の時の上洛には將軍に從ふもの諸大名以下凡そ三十餘萬七千餘人と稱せられてゐる。此の內に男山八幡瀧本坊の檀那も交つてゐたので、昭乘は此の機會に住持續目の挨拶に廻つたのであらう。昭乘が瀧本坊の住持になつたのは何年の事か明白ではないが、始め瀧本坊中興の祖大阿闍梨寬乘の弟子となり、受法し、式部卿房といひ、鐘樓坊に住持し、師匠寬乘の寂後瀧本坊の第二世を繼いだのである。昭乘は寬永十六年九月十八日五十八歲で示寂したから、此の時は五十三歲

であつた。此の後寺を弟子乘淳に讓つて、自ら方丈の室に隱居し、それを松花堂と號したのである。乘淳は俗兄中沼左京亮元知の子で、始め鷲之助といひ、出家して帥房乘淳といつた。松花堂の傳記は佐田川昌俊の記した行狀一冊があつて極めて詳密であるが攝津堺の出生を和州奈良の產といひ享年を五十六歲とするなど、多少の誤謬がないでもない。

四　本阿彌光悅書狀

本阿彌家は刀劍の鑑定で一家をなせるもの、光悅は家業に秀でたのみならず諸藝に達し、畫は海北友松を師とし、土佐家の風を交へて、溫潤な一種の風格をなしてゐる。書は東求院から入木道を稟けたといはれてゐるが豐膏な一家の風を始め、稍卑俗の感を免れない。併しながら好んで豪華な金泥の下繪のある鳥子紙に、詩歌等を散シ書にしてゐるのは、裝飾的價値が十分である。此の書狀は鷹峰茶碗の添狀であつて、折紙に大きく書かれてゐる。

尙以五明
貳本進上
仕候。少風
佳慶可レ被レ任二
氣に御座候へは
貴意一候。舊
物を出申候。已上。

冬日々々可レ爲二
御膽野一
推量仕候。次に
左馬助樣被レ仰候
茶碗、大かた
出來仕候間、
先日御上被レ成候
御茶碗唯今
山新七方事
傳下申候。此方ノ
茶碗出來
江戸へ進上
可レ申候。爲二新七一
可レ令二申上一候。恐惶
謹言。

德有齋
正十四日　光悅(花押)
加式少樣
人々御中

文中の左馬助樣は踐ヶ岳の七本槍の隨一として勇名を謳はれた加藤嘉明で、宛名の加式少とあるのは、其の子式部少輔明成である。光悅は織部流の茶道に秀で、自ら茶器を製した。此の書狀は文面によつても

明な如く加藤嘉明から依賴せられた茶碗を作つて、それに添へて其の子明成に與へたもので、今其の茶碗と共に東京帝室博物館に傳へられてゐる。嘉明は寬永八年九月に卒したから、此の狀は其の少し以前のものであらうと思はれる。

五　澤庵宗彭書狀

近世の大德寺諸老の筆蹟は茶人者流から特に悅ばれるが、明人俗蹟の餘風を承けて、決して庶幾すべきものでない。中に獨り澤庵の墨蹟は最も卓越して、其の人と共に高風仰ぐべきものがある。此の書狀は

尙々紫園無事候。
近日左右承候。清
泉寺息災之由候。

的便之間一書
猶期二後音一候。

令二啓達一候。御息
災候哉。當年
相公御入洛之由
其沙汰候。定而
可レ爲二御供一候條、
其節可レ遂二向顏一候。
恐々謹言。

宗彭(花押)
初夏朔日　宗鏡寺
道三法印
藥局下

とある。宛名の道三は幕府の醫官今小路曲直瀨玄朔正紹であらう。澤庵の肩書にある宗鏡寺は其の故鄕但馬出石にあり、師が甫めて十四歲にして淨土宗唱念寺を出て禪宗に歸入した所である。元和六年から數年こゝに住んでゐたのみならず、流謫地上山から釋されて江戶に出てから後も、屢々これに歸棲してゐる。文中將軍上洛の事が見えてゐるが、其の頃將軍の上洛したのは、元和三年五月と同五年五月に秀忠が上洛し、同九年六月秀忠入洛し、尋いで家光上洛して將軍宣下を拜した。後復た寬永十一年に家光が上洛したことは、松花堂の書狀を解說した所に述べた通りである。此の間元和三年、同五年には澤庵は未だ出石に歸らず、寬永十一年の四月朔日には江戶の駒込に居つて、其の六月將軍の命によつて上洛してゐる。唯元和九年は恰も出石に居る頃であるから、此の狀の年紀はこれによつて推定し得られると思ふ。

六　石川丈山書狀

石川丈山は藤原惺窩から宋學を稟け、詩に長じ書は惺窩と共に近世唐樣の魁をなし、特に隷書に名がある。書札に於いても俗蹟の臭氣が無い。此の書は折紙に書かれてあつて、

尙々永日州在京
之由申候間、定而細々御

出合候はんと令ン察候。久々
不レ出レ臥内一、養生申候へ共、
日々に惡寒出没、迷惑申候。
仙木方迄之御書
委元は于レ今寒氣難レ消故、
中具拜見、殊
本復不レ申候。向二炎熱一候はゝ、
鹽魚淹鱗
七夕之時分はいかなれ能候半
一藍恵悦、芳意
かとは存候。
難レ謝候。御目病
萬々期二面一候。以上
未レ被レ得二清快一之
由、令レ勞二想像一候。
眼力者一身之
日月に而候間、無二御
油斷一御保養
專一に候。老夫
自二去六日一爲二風
邪所一冒、
氣者相退候得
共、餘疾未レ得二良
効一、帳内に令二平
臥一、氣之毒に存候。
隨而舊君七夕時
分御上著候半由、
就レ其御供可レ被レ成
由御尤に存候。拙恙
本復申候はゝ、伏見まて
罷出度存候□(得)□(共)、老
病難レ計候間、又偽
之様に罷成候まゝ、然
諸難レ成存候。道祐
丈者定而可レ爲二在江
戸一と令レ察候。其内
御報可レ進候間、傳達
所レ希候。將亦友元事
林子自二兄弟一禮謝
くれ〳〵被二申越一候。
御下向前氣宇清
快、道路穩清之時分、
不圖來訪相期候。
ヤ々不字。

卽刻　丈山

壽閑樣回章　之

とある。宛名の壽閑といふのは丈山の舊主淺野長晟の侍醫黒川氏で、書き始めの仙木とは又丈山の侍童平井敬齋であり、又袖書にある永日州とは山城長岡の永井日向守直清である。袖書に「永日州在京之由」とあるから、此の時壽閑は京都に上つて居つて候、定而細々御出合云々」とあるから、此の書は其の敬齋の所へ宛てゝ丈山に書を寄せて來たのであらう。此の書は其の使に持たせて返した返書であらうと思はれる。「永日州在京之由」とあるから、寛永十八年洛北一乘寺村の詩仙堂に隱棲してから後のものである事が知られる。文中の道祐丈といふのは卽ち壽閑の子の有名な遠碧軒で、「在江戸」とあるが道祐が江戸に下つたのは鷲峯文集によると承應三年であるといふ事である。然らば此の狀は同年のもので、丈山七十二歲の筆蹟である。なほ文中の舊君とは長晟の子の光晟で、此の年光晟が上洛したのであらう。其の他友元とは人見卜幽軒の姪に當る人見竹洞で、林子の兄弟とは羅山の子鷲峯と讀耕齋の事であらう。

七　新井白石書狀

新井白石の書は非常に美しく、文徵明の風を倣つて其の骨髓を得てゐる。寧ろ徵明を更に華麗にしたものである。彼は幼年の時、寒夜に冷水を浴びて習字に勤んだと傳へられてゐるが、實に彼の書は刻苦の結果になつたもので從て其の豪邁な人物とは相似ない樣に思はれ、或は多少の匠氣をさへ帶びてゐるが如くに感ぜられる。書牘に於いても奔放な所に、なほ格を存してゐる。假名は時流を追はず、稍古代を心懸けたらしい。此の書狀は退緖色の半切紙に書いたもので、

今日御開講目出候。
雨中にて聽者さためて
有レ之ましと存候處に、
存之外多候而、御仕合に候。
平三入席勿論に候。
寛齋昨日勤め
られ候か、遠方
出席之事深情幸甚
事候。日下氏初而
御講うけ給り、事の外
なるきもつふしに候。
これにも明日之比御出候はむ
よし、外に御用も候はゝ
格外にて候。御付屆は
返々入候ぬ事に候。
御隙には御うつしもの
賴入候。今よりは大切
の隙に候間、日を御惜
可レ給候。自寛翁には
とても御隙に候。近日

御悦として御出可レ爲二本望一候。重而二三座之間は此元わかき奴原可レ遣候。あなたにて御用も御申付候ために可レ然候。まつ爲二御悦一如レ此。御兩親樣へよく〳〵奉レ賴候。〳〵。

二月五

土肥源四郎樣　新井筑後守

とある。宛名の土肥源四郎は白石の門人霞洲である。霞洲の始めて講義をした事を賀したものらしい。霞洲は白石の文字を習つて最も髣髴としてゐる。白石の著書は多く霞洲に清書をさせたので、文中に「御うつしもの賴入候」とあるのは此事らしく思はれる。白石が筑後守に任ぜられたのは正德元年十月で、此の書狀は元年から享保元年處士となるまで、卽ち正德年間四五年の間のものであらう。

八　荻生徂徠書狀

荻生徂徠の書は奔放自在卓犖其の人を見るが如くである。此の書狀の如きも禿筆を驅つて、殆ど人の思はくを顧慮してゐない。本書は切紙であるが、もとは折紙で、其の一片がなくなつたものらしい。釋文は、

追啓。近頃御世話ながら、賴入度義御座候。樂琵琶ノ紘二具ホド御調被二差下一可レ被レ下候。此地無レ之候。但シ四ノイトキレヤスク候條、四ノイトカケガヘ添候て、御調可レ被レ下候。御世話千萬なから、手代衆に成共被二仰付一可レ被レ下候。代物先ツ御取替被レ遣可レ被レ下候。被二仰聞一次第早速新城屋迄可二差遣一候。千萬〳〵。以上。

茂卿

若水樣

といひ茂卿と署名してゐるのは彼の字である。最初に追啓とあるから、此の外に本文があつて、それが失はれたものであることが知られる。宛名の若水といふのは本草學者の稻生若水で、金澤藩に仕へて儒醫となつてゐたのであるが、此の時京都邊に居つたのであらう。

九　細井廣澤書狀

細井廣澤は北島雪山に就いて文徵明の書を學んだ。儒を以て柳澤

吉保に仕へたが、却て書名を以て世に聞えてゐる。併しながら書狀は俗臭の風を脫してゐない。

曲直瀨正琢樣　細井次郎大夫

……

今日者預二御手紙一忝奉レ存候。其節罷出不レ及二貴酬一候。愈御勇健珍重之儀奉レ存候。然は來廿一二三、右三日之內參上可レ仕旨、辱仕合奉レ存候。廿三日以二參上一可二申上一候。一類同前之者大切相煩罷在候、若其節まて善惡ともに隙入可レ申哉、難レ計奉レ存候。先右之通廿三日可レ致二伺公一候。以上。

七月十七日

宛名の曲直瀨正琢は幕府の醫官今小路養安院雪翁の事である。

一〇　中井竹山書狀

大阪の懷德堂の諸教授は始祖の三宅萬年以下何れも書に秀でゝゐるが、竹山も亦立派な筆蹟を遺してゐるので、本書狀によつても其の一端を窺ふ事が出來る。此の書狀は小さい切紙で、

備國之海參賜一器、珍布可レ遂二賞味一、感荷之至、且又榮螺五箇、料理迄被二仰付一惠送、別而大慶、早々供二一酌一可レ申候。欣幸千萬〳〵期二面謝一候。頓首

十一月十三日　善復

並玉潤足下

とあり署名に善とあるのは其の名積善を略したもので、宛名の並玉潤は京都の並河天民の一族であらう。

一一　荷田春滿書狀

春滿の筆蹟は其の人物を反映して、非常に英氣に富み、且つ潑剌たる才氣を示してゐる。早歲のものは稍弱さがあるが、年と共に熟達して、晚年のものは頗る美しさを增してゐる。此の書狀は

御男子御出生之賀に愚詠可レ呈之由先便被二仰聞一候節、取紛候事有レ之

致二延引一候。月次會例便を待合ては猶延候故、以二町飛脚便一呈二愚詠一候。思食にも若相叶候へは、本懐に候。若又松竹龜鶴なとに寄候而詠進可レ申候はゝ、改詠可申候。今月時節故、以レ梅認申候。萬喜期二後便一之節一候。恐惶謹言。

若木梅

神かきの松に契てさく梅の
若木のはなやちよもにほはむ

羽倉齋

二月三日　春ろ万

西東中務少輔樣

とあり、元祿十二年の夏、三十一歳にして江戸に出で稻荷社傳の神道と、後陽成天皇御傳授の歌道とを以つて、家名を天下に揚げようとした、其の頃のものであつたらうと思ふ。宛名の西東中務少輔といふのは、芝神明の祠官で、彼の門人である。

一二　賀茂眞淵書狀

眞淵も亦能筆である。其の書は大體三期に區分することが出來る。最初は其の師春滿の早期の筆蹟を善く習つてゐたが、中頃古代樣を學び晩年には一種癖のある蒼古な書を書いた。此の書狀は中期のもので、詠草、短冊とは多少趣を異にしてゐるけれども、又力のある且つ流暢な樣子を窺ふことが出來る。原書は半切卷紙に書かれたもので、非常に長卷である。內容は彼が萬葉集に傾倒する以前の和歌に關する意見を吐露してゐるので、和歌史上又國學史上頗る有益な資料であるけれども、餘りに長いので本書では紙數の都合上、其の最後の部分のみを收載するに止めざるを得なかつた。但しこゝには釋文のみに止めず、本文全部を引用することゝする。

尙々力之助方へ之書狀、乍二御世話一早々御屆可レ被レ下候。奉レ頼候。本月三日出之貴札相屆忝拜見、彌北堂樣始、無二御別事一無二御座一、被レ成二御座一奉レ歡候。御小兒樣も御成長と奉レ存候。拙者儀四月は少々不快罷在候所に、當月へ入全快、相勤罷在候。來月十三日より萬葉之會讀望候衆多候而始可レ申候。御近所ならはと遠念奉レ存候。御當地はさまざまなる人□□大儒に和學好候人も多候。手前萬葉會へも博學之儒醫も二三人出申候筈に候。隨分和學御はけみ可レ被レ成候。國史記錄延喜式等何篇も御覽被レ成候かよく御座候。神學は御家之事に候間御油斷はならぬ事に候へ共。餘りそれにのみ屈候而は、區々たる事に成候間、必御了簡被レ成候而廣く先々御通し可レ被レ成候。歌は六家集或は千載集、新勅撰なとゝつゞねに御覽候て御詠可レ然候。西行なとかすかた、心のなひやかにして、氣象の高き所、定家のも、よく〳〵六家集を御覽被レ成候はゝ、氣象の高き、すかたのやすらかなる、詞のすなほなる、つゝけから御心に可レ被レ入候。古歌は云に不レ及事なから、直に古歌はかり見候ては、今の人は却て歌からいやしく、詞もあしくなり申候。只歌は野になき樣に御心かけ可レ被レ成候、わるくすれは氣象ひくき故歌いやしく、詞だみ申候。歌のおもしろく巧なる所には御目付られす、すかた心のやさしくなひやかに候所を御心付御よみ可レ成候。六百番歌合なとの俊成ノ判に云所の歌のやさしき所をとり、詞のよろしからぬを吟味せし事、よく〳〵御覽可レ被レ成候。いかゝなる申事に候へとも、近年御當地へまいり、世上の人につき合、其上先師の名をくたすましとのみ存候て、一歌よみ候にも心を用候て、よく〳〵古歌新歌を吟味候へは、少々存當候事も御座候上に而前々のよみかたよろしからさる、其外同門の人々の歌のよろしからぬ多きを、漸心得申候まゝ、くはしく申上候。みたりに歌は多くよめはやけかつき候而、終にやくにたち不レ申候。今は此方に而も本鄕なとに而も、殊之外之ねりに御座候。頃日も本鄕のおふりとの近邊の早歌屋へよはれ候て被レ望候（以下本書ニ續ク）へ共、當座歌はよみ候而も出し不レ申候。幾日もねり候樣に兄申候間、明日可レ懸二御目一よし被レ申候よし、成ほと左樣にたしなまねは歌にはなり不レ申候。何萬首よみ候ても却て害に成申候。然ともいかふ功者の上にては、また早々に申候事少しわけ有事にて候。初學には必早歌は御用除可レ被レ成候。十首よまんよりも一首にてよく御座候。向後は御歌隨分やすらかに、自から難問を御付候て、御吟味被レ成候樣にと奉レ存候。取込候間書ちらし申候。御免可レ被レ下候。

一山家五月雨御詠草、其內返進可仕候。拙者歌いかふ不出來乍レ例當年は別而出來不レ申候。段々さかり申候樣に被レ存候。

五月雨はをやむもわかす谷の庵に雲より落るまきの下露

まきは深山の物に而御座候。

更衣

たちかへてけふは身なから心にもまかせぬ花のたもとをそおもふ

郭公の歌の中に

橘のかをれる宿の夕くれに二聲鳴て行ほとゝきす

いつれも何の曲もなく候へ共、御慰に書付上申候。北堂樣へも御めにかけ可レ被レ下候。尙追而可二申上一候。恐惶謹言。

五月卅日夜　三四　眞淵

此の署名に「三四」とあるのは、彼の早い頃の通稱で、後には衞士と改めた。此の書狀は江戶へ出て間もなく、而も田安家に仕へた後のものである。宛名が無いから誰に送つたものか明ではないが、「神學は御家之事に候間」とあり、又文中の「本鄕」といふのは春滿の女荷田蒼生子の事であるから荷田家に多少關係のある神職に與へたものであらう。所藏者佐々木博士の著「賀茂眞淵と本居宣長」の中に「鄕里の神官、卽ち濱松の杉浦氏であらう。然らずば森氏或は見付の齋藤氏等のうちであらう」といつてゐられる。

一三　本居宣長書狀

宣長の書は不器用の樣で、整然としたうるはしさがあり、潤の樣で力強く手堅い所がある。又一種の名筆であらう。彼は國學の重鎭で

あるだけに、以後の國學者達は多く其の風を模した。義子大平の模倣はまだしもであるが、平田篤胤に至つては、不器用相な所だけを巧に習つたものである。

去月廿七日之御狀相達、致二拜見一候。逐日冷氣之節愈御安全御座被レ成候由、珍重奉レ存候。愚老無事罷在候。乍二慮外一御安意可レ被レ下候。誠以春中は御出、久々に而得二貴面一、大慶不レ斜奉レ存候。乍レ去此度は御逗留も無二御座一、殘懷之至奉レ存候。其後京都ニ久敷御逗留被レ成候由、御任叙も無二滯相濟申候段、千千萬々目出度奉レ賀候。扨五月下旬御歸國後、御不快ニ而、久しく御引籠被レ成候由、御難儀可レ被レ成候。乍レ去七月末より御全快之由、先以珍重奉レ存候。此方に而も其後御便り無二御座一候ニ付、いかゝと毎度御噂は申ながら、多用に取紛御尋も不二申進一候處、此度御狀被レ下、安心いたし申候。

一古事記題詠之儀被二仰下一致二承知一候。集り次第御越被レ下候樣奉レ願候。且又消息文例も御淸書出來申候はゝ、致二拜見一度候。

一河本忠五郎詠出斷之由致二承知一候。

一尾州植松忠兵衞より玉のをくしさし進申候由、是も早クより植松へ申遣置候處、植松よりは早速さし進申候由申越候へ共、貴君より御落手之由不レ承候に付、いかゝやと存罷在候所無二相違一御落手之段、致二安心一候。植松へも右之段可二申遣一候。扨右玉のをくし壹部は、先達而御序文を被二成下一候故、貴君へ進上之筈ニ御座候間、左樣御思召御收納可レ被レ下候。先は右御報得二貴意一度如レ此御坐候。

尙期二後信一。恐惶謹言。

九月廿七日　　宣長

藤井長門守樣

宛名の藤井長門守は彼の門人中の高足なる高尙(松屋)で備中吉備津社の祠官である。文中の「消息文例」は其の著書で寬政十一年に脫稿してゐる。高尙は同年又江戸に出た次に松坂に行つて宣長に逢つてゐるので傍此の書狀は此の年のものであらう。

一四　加藤千蔭書狀

國學者の中最も手蹟の秀でゝゐるのは眞淵門下の加藤千蔭と村田春海との兩人であらう。殊に千蔭の筆蹟は市井の間に廣く行はれ、千蔭樣といつて、婦女子などに多くこれを習ふものがあつた。優にやさしく、稍なよひやかな所があつたが、書狀には流石に達筆に、如何にも能筆の貫目を示してゐる。此の狀は行成紙の半切に書かれてあつて

苦熱誠難レ堪候。

御安泰被レ爲レ渡候御事と奉二存至一候。千蔭久々疝積に而、心背徹痛、難儀仕候處、段々快復仕候。抑先便も申上候通、萬葉略解三篇めおさかへの君へ奉候事、甚延引に相成、奉二恐入一候。漸此節尾州より下候間、可レ奉レ獻候。何分宜御取成奉レ願候。

右之代りに何とそ萬葉中人万呂か赤人かの長歌一首、唐帋一枚へ竪に御染毫被二成下一候樣奉レ願候。少々涼相成候はゝ宜しく奉レ願候段御願可レ被レ下候。

餘は先便にも申上候ニ付省略。謹言。

閏月十二日　　千蔭

雲錦主君

尙々御家內樣へ宜奉レ願候。□に御意可レ被レ下候。

當年之暑さ如何。小子なとは甚苦しく覺申候。何もかも投出、たゝ晝內は臥り居候より外は無レ之候。されと夜前なとは甚清光、やゝ深更までなかめをり申候。たゝ燒娘を貰候儘は昔にかはり不レ申候。

なかめ來て老と成ぬる身のはては月のみやこに入よしもかな

右はふと付候歌にて、御一笑に備候也。

とあり、宛名の雲錦主君は山城上賀茂の祠官賀茂季鷹である。餘り達筆なので解讀に苦しみ、一箇所空白のまゝ殘して置く。諸君子の御垂教を希ふものである。

續書狀集解說　終

237
379

昭和八年三月十五日印刷
昭和八年三月二十日發行

（日本名筆全集）
（續書狀集）

編者　岩橋小彌太

發行者　東京市麹町區飯田町六ノ二三　長坂金雄

印刷者　東京市神田區今川小路一ノ一　山縣精一

印刷所　東京市神田區今川小路一ノ一　山縣製本印刷株式會社

美術印刷　東京市京橋區寶町三ノ一　長澤玻璃版印刷所

發行所　東京市麹町區飯田町六丁目二十三番地　雄山閣
電話九段二三一四番
振替東京二四二二七番

版權所有

237
379